

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成二十七年六月十一日發行

國語國字

第二〇三號

目次

第九十六回 講演會（平成二十六年十一月一日）

わが言語觀

帝國陸軍典範令に觀る文語文の躍動感

寄稿

上代特殊假名遣の發見

日常語に見られる尺貫法

縦書きの意識と感覺（その六）

水谷靜夫の危惧

日本文藝復興の提唱（一）

かおれ

神祕なる國の神祕なる言語

式子内親王御歌一考察

「文語朗讀會」の成果發表會

日中英 言葉の雜學（九）

和歌 熊野詣

後書

谷崎 昭男 1

石井公一郎 7

山崎 馨 14

大喜多俊一 18

若井 勳夫 23

上田 博和 26

市川 浩 28

高崎 一郎 32

高田 友 33

安田 倫子 36

加藤 忠郎 40

高田 友 42

安東 路翠 46

谷田貝常夫 48

題字・插書

近藤祐康

わが言語觀

谷崎 昭男

只今御紹介いただきました谷崎でございます。福田恆存さんが中心になつて始められた國語問題協議會の會合において、皆様にお話をさせていただく機會を得まして、大へん光榮に存じます。

「福田さん」と馴れ馴れしくお呼びするのをお赦し下さい。福田さんが亡くなられた時に「文學界」に追悼文を寄せましたが、そこで私が福田さんに近づきつかげになつた経緯について書きました。

今から五十年前の昭和三十九年、東京教育大學——東京教育大學といふと、ああ、今の筑波大學かと受けとるのが大方でせうが、後に筑波移轉反對闘争の渦中にあつた東京教育大學大学院に學んだ私の心裡には、兩つは全く別の大學であるといふことは、それとして、——東京教育大學附属駒場高等学校の文藝部の機關紙「やまがみ」に載つた小説が、その後商業誌に轉載されて注目を浴びました。私はそれを讀み、その才能に驚きました。出版社も高校生が書いたといふことで「十七歳作家の誕生」といふ見出しで世

間の注目を喚起してをりました。

その高校生は書評誌のインタビューで、好きな作家は誰かといふ質問に對して、「三島由紀夫と福田恆存」と答へておました。三島由紀夫が好きだといふのは、早熟な高校生であればあり得るだらうと思ひましたが、福田恆存といふのはどう云ふことであるか、理解に餘るものでした。當時、大學生の間では、福田恆存は必ずしも好意的には見られてゐなかつたからです。その高校生の書いた小説が大へんよく出来ておましたので、さういふものを書く高校生が言ふのであれば、聞かなければならぬだらうといふことで、私はそれから福田恆存を讀みはじめました。新潮社から出てゐた八巻本の「福田恆存著作集」を購め、一生懸命讀んだといふのが、私の文學への関心の始まりのやうな氣が致します。

私はその頃、壇一雄氏が主宰してゐた季刊文藝誌「ポリタエア」に参加してをりましたが、その第七號（昭和四十四年）に「福田恆存」といふ題の評論めいた文章を書いていくらか世間に認められたといふのが、私の出發點でした。

その頃から私は、私信のやうなものは歴史的假名遣に従つてをりましたが、批評や一般的な文章を書くに際しては、——私は中學生の頃から「現代かなづかい」で育つた、謂

はば「失はれた世代」に属してゐますので、——歴史的假名遣を使ふのは何か氣障といふか、氣恥づかしさが先に立つてしまひ、ずいぶん長い間、歴史的假名遣で批評文を書くのを躊躇つてをりました。それが、十年餘りになりますでせうか、學内の廣報誌のやうなものは「現代假名遣い」で書きますが、ほとんどの文章は歴史的假名遣で書くやうになりました。

言葉の亂れについて

近年、「言葉の亂れ」「日本語の亂れ」といふことがよく指摘されます。私も最近、奇妙な日本語に出會つて氣持のわるい思ひをしたことが少なからずありました。それを少しばかり述べてみます。

○言葉を短くつづめる言ひ方。

「ドキン」——「土足禁止」を「ドキン(土禁)」と言ふのです。「取説」とりせつ(「取扱説明書」のこと。「原則」と言ふだけ。

○接続詞「ならばどうだ」といふ言ひ方。

○「いただく」の多用。

「御乗車いただけません」といふ言ひ方。又、全車禁煙なので、「お吸ひいただけません」といふ言ひ方。

は、若者たちの仕業のやうに言はれるけれども、むしろ終戦後に無理矢理に行はれた國語改革、なかんづく假名遣の變更が最も大きな原因を成してゐるのだらうと、私は観測いたします。古來の國語學者たちの、長年の研究・研鑽を経て創られたところの、傳統的假名遣(歴史的假名遣)を廢止し、「現代かなづかい」——その後「現代假名遣い」となつた——なるものを強行したことによつて、「時代前の歴史的假名遣で書かれた文學作品が、讀めなくなりました。その文化的損害たるや量り知れません。實に假名遣の變更は、國家による文化的犯罪であります。

例へばフランスでは、スタンダール(一七八三—一八四三)の小説は、——今から二百年前から百七十年前に書かれた作品ですが、——誰でも讀むことができます。フランスでは假名遣(スペリング)の變更——發音と表記が異なるので發音通りに表記に變へよう——などといふ愚かな事はしなかつたからです。日本の場合、假名遣を變更したことで、「昔前の文章すら讀めなくなつてきてゐます。これは何とも無慚なことでありませぬ。福田さんが「私の國語教室」その他によつて展開された、國語問題に関する御發言は、すべて全くその通りだと、私は賛同いたします。

例へば「氷」は歴史的假名遣では「こほり」と書き、「行

○「秋田犬」「柴犬」

現在、一般的には「あきたいぬ」「しばいぬ」と呼ばれてゐますが、私は「あきたけん」「しばけん」と呼びたい。

○紀州の梅「南高梅」

「なんこううめ」と一般的に言はれてゐるが、私は「なんこうばい」と言ひたい。

○佐藤春夫の小説「掬水譚」

「きくすいものがたり」でなく「きくすいたん」が正しい。同じく佐藤春夫の詩「望郷五月歌」の「五月歌」を、「きつきうた」と讀む人がゐるけれども、「こくわつか」と讀むべきです。

○「……してもらつていいですか」といふ言ひかた。

ある集會所で會議があり、受付でその場所を訊ねると、「五階まで行つてもらつていいですか」と云はれた。「五階へ上つて下さい」でいいではないか。

又、「電話を下さい」あるいは「電話をいただけませんか」と言ふべきところを、「あとで電話をもらつていいですか」と言はれて仰天した。

假名遣の變更は國家による文化的犯罪である

かうした變な言ひ方や、誤用が氾濫するやうになつたの「李」は「かうり」と書きます。「現代假名遣い」では、「氷」は「こおり」、「行李」は「こうり」です。なぜ現代假名遣では「氷」は「こうり」としないのか。これは歴史的假名遣で「オ」の發音を「ほ」としてゐるものは「現代假名遣い」では「お」としなければならぬと決めたために「こおり」となつたのです。「現代假名遣い」を習得するには、歴史的假名遣を辨(わきま)なければならぬといふ、まことに滑稽な例であります。

言葉の秩序と事物の秩序は異なる——さういふ言語感覚を「現代假名遣い」は養はない、といふのが私の美感覺です。言葉は事物どほりに寫すことはできないといふのは當り前の話ですね。福田さんもどこかで言つてをられました。言葉は同時存在を寫し取ることはできない。

例へばフロベール(一八二一—一八八〇)の小説「ボヴァリー夫人」の結婚式の披露宴の場面ですが、ウエディングケーキが置かれてゐるのを説明してゐる箇所があります。目で見ればすべてがはつきり分るのですが、小説の場合、まづ言葉で上の部分はどうで、横からみたところはかうで、最後に一番下はかうであるとデコレーションの説明がなされてゐます。つまり目で見ればすべてが同時に捉へることができませんが、言葉にすると順序を追つて捉へなければならな

い、これは事物を事物どほりに寫してゐないといふことになりぬす。書ひ方を變へれば、言葉になつた世界——「嘘の世界」といふことになりぬす。

讀書の世界と言葉の世界の間には一つの隙がある、距離がある——さうした緊張関係の中でわれわれは言葉を繋いで行く。歴史的假名遣はさうした感覺の上に成り立つてゐますが、「現代假名遣い」にはさうした感覺はありません。歴史的假名遣は、福田恆存さんが「私の國語教室」で主張してをられますが、「語に隨ふ」——すなはち語（言葉）の感義や語源を基本とする、といふものです。「現代假名遣い」はと言ひますと、その時代その時代の發音を基とする。語義や語源などに關係なく、ただ發音どほりに表記するといふもの。正に「表音主義」であります。従つて、言葉とわれわれの間に緊張關係の生じやうがなく、言葉が平板になつて、だらだらとしたものになる。さういふ大きな變化を私は假名遣の變更から考へるわけです。それが又、先ほど申上げた言葉の亂れにも繋がつて行くのだらうといふ風に思ふわけです。

最近短歌でも「現代假名遣い」で表記されることが珍しくなくなりました。短歌、散文ともに歴史的假名遣によつて冊子を作つてゐるのが、この春お亡くなりになつた山川言ひ切つてゐるわけです。これは一つの理窟だといへば理窟でせうけれども、ただ個人が恣意的に假名遣を定めるといふ道り方には私と同じがたい。誰もが同じやうに假名遣に従ふ、といふことでなければならぬだらうと思ひます。丸谷氏に同調する人は今のところ現はれてゐないやうですが、しかし丸谷氏は、假名遣の問題に「一石を投じた」といふ風に言へるかもしれません。

レジュメにも記しましたが、「現代假名遣い」による文章を歴史的假名遣に置き換へれば、それで歴史的假名遣で書かれた文章になると云へば、必ずしもさうとは云へない、といふのが假名遣の問題の一つのポイントだらうと思ふのです。歴史的假名遣を使はない方でも、充分に歴史的假名遣に馴染んでゐる人であれば、「現代假名遣い」で書いても、歴史的假名遣の感覺のやうなものが傳はつて來ることはある、といふのが私の意見です。私は「現代假名遣い」で書く場合でも、手順としては、歴史的假名遣の文章を自分の頭の中で作りながら「現代假名遣い」に移して行く——さういふ書き方をしておきます。

今後、ほとんどの人が歴史的假名遣に觸れることがない——さういふ時代になるのではないか。さうなると日本語

京子さんの主催してゐた「桃の會」。わが先師の保田與重郎の始めた「風日」といふ冊子。不二歌道會の「不二」といふのがありますけれども、それくらゐでせうか。

散文のものでは、國語問題協議會の機關誌「國語園子」。それから「あらたま」といふ雑誌でせうか。

歴史的假名遣によつて短歌を作つてをられる方に對して、どうか散文も歴史的假名遣によつて書いていただきたいとお願ひしたいのです。さういふ方が増えてくれば、國語が少しづつであれ、良くなつて行くのではないか、歴史的假名遣が浸透してくるのではないか、といふ風に思ふのです。現在、歴史的假名遣で文章を書いてをられるのは、小堀桂一郎氏、高井有一氏、桶谷秀昭氏くらゐですね。これらの方々が最後になるのでせうか。

歴史的假名遣を主張してゐた丸谷才一氏が亡くなられた。丸谷氏の主張する歴史的假名遣は大和言葉に限るのですね。純漢字音、すなはち字音假名遣は、中國語の音に似せて作つたのだから、われわれの用ゐる漢字音の表記に歴史的假名遣と謂はれてゐるものに隨ふのは、何の意味もない、といふのが丸谷さんの意見です。ですから、例へば「蝶」——「てふ」といふ風にわれわれは書いてきましたが、丸谷さんは、それは意味がない、「てふ」は「ちよう」でいいんだとはどうなるのか。真に寒心に堪へません。非常に心配になります。國語問題協議會の存在が、これからますます重要になつてくるのではないか、といふ風に私は思ひます。

高井有一氏は歴史的假名遣を用ゐずつと文章を書いて來られたわけですが、よく人から、「どうして歴史的假名遣で文章を書くんだ？」と訊かれることがあるさうです。さういふとき高井さんは、『現代假名遣い』は何か胡散臭い。だから歴史的假名遣で書いてゐるんだ」と、さういふ風に答へると、どこかで言つてをられました。高井さんは福田さんの周邊にあつた人ですから、もつと明確に理由を言ふことが出來たのだらうと思ひますが。

最高の文章とは、いかなる文章か

最高の文章とは、生き難い人生を生き抜く力を與へてくれる文章で、ほんたうの意味での、それが文學です。文章といふのは、書き手の人間性あるいは個性の表現——すなはち各自それぞれの思想や感情の表現——といふ程度のレベルに留まつてゐるうちは、未だ未だだ、といふのが私の考へでして、人間を超えて、神の世界に繋がつてはじめて、人を生き生きとさせます。さういふ力を持つてゐる文章こそが第一級のものだといふ風に思ふのです。

冒頭に谷田貝事務局長が私を紹介して下さいたとき、佐藤春夫と谷崎潤一郎のことに觸れてをられました。

佐藤春夫と谷崎潤一郎を並べて、文學としてどちらが高級かといふと、私は躊躇はずに佐藤春夫の方だと思つてをります。その文章に觸れて、生きる力を與へてくれるのは佐藤春夫の作品で、谷崎潤一郎の作品は、まあ顧ませるかもしませんが、さういふ力を與へてくれないといふのが私の診断です。哲學者の西田幾多郎は、谷崎潤一郎の「春琴抄」を評して、「面白くない」と言つてゐます。西田は、D・H・ローレンスの「チャタレイ夫人の戀人」を、まだ日本語の翻譯が出てゐなかつた頃にフランス語譯で讀んでゐて、「春琴抄」より「チャタレイ夫人の戀人」の方が面白かつた。なぜかといふと、「春琴抄」は人生いかに生きるべきかを描いてゐないから」と評してゐます。

何を描いてゐるからといふより、「生き抜く力」を、「亂世を生き抜く力」をどれだけ與へてくれるか、文學の問題はそれに歸するだらうと私は考へます。保田與重郎は若いころを回想した文章の中で、「みんな『革命だ、革命だ』と叫んでゐた。文章にも『革命』といふ言葉が躍つてゐなければ、革命的な文章は一つもなかつた」と書いてゐます。「革命」が、ただ氣分的に唱へられてゐたにすぎなかつたといふこ

昭和十九年一月二日 於日本俱樂部

帝國陸軍典範令に觀る文語文の躍動感

石井 公一郎

御紹介に與かりました石井でございます。

本日は私が作つた紙芝居アニメ（漫畫ですわ）を持つて參りました。私は九十一歳で漫畫界にデビューしたわけでありませぬ。これからも更に作つて行かうかと思つてをります。このたび作りました第一作目は「日本昔話三人の兄弟」です。原典は岩波文庫にあります「日本の昔ばなし（關敬吾編）」の中から選び、勝手にフィクションを膨らませ、映像作品に仕立てたものです。數多くある「日本の昔ばなし」の中から「三人の兄弟」を選んだのは、これが一番面白いと思つたからです。岩波文庫の「日本の昔ばなし」にはそれぞれ出所が記してありまして、「三人の兄弟」は「官城縣桃生郡」とあります。

これは非賣品でして、私は儲ける氣は全くありません。本日、皆様にお持ち帰り戴ければ、と存じます。

さて本日は文語文の特質について——その力強さ・躍動

とです。

繰り返しますが、人に元氣を與へる——さういふ文章を書く。それが文學の力だと思ひます。福田恆存さんの作品も、さういふ力を與へてくれます。福田さんは、國語問題に關する議論をしても、ただ理窟を捏ねるのではなく、福田さんの國語論は人間の生き方を示す「文化論」を成してゐるのです。福田さんの語る言葉そのものが、生きる力を與へてくれます。

最後に、私は福田恆存さんの「私の國語教室」の生徒の一人であると自認してゐますが、その教室の生徒さんが一人でも多く増えることを祈願してゐますと、申上げたい。

（たにざき あきをを 相模女子大學學長）

感についてお話しようかと存じます。その例として、陸軍典範を擧げてみました。

私は昭和十八年十二月に入隊いたしました。「學徒出陣」と世の中で騒がれた、あの折の入隊です。此處にをられる國語問題協議會會長の小田村四郎君もその御一人であります。小田村君は砲兵隊に入隊し、私は甲府の歩兵聯隊に入隊しました。この聯隊たるや、鐵拳制裁で有名で、毎日ぶん殴られる生活です。初年兵は安心して仲間と話す機會すらない。たまたに演習に行つて十分間の小休止が與へられ、煙草を吸つてもよいと言はれる。（煙草に關しては寛大でした。）その小休止の間に仲間同士で何を喋つたかと云ふと、「よく漫畫などで殴られると目の前にパーッと星が出るとあるけれども、あれは本賞だね、そんな話です。」

昭和十八年の兵隊は裝備も完全でした。私は機關銃中隊にをりましたが、一人一人に小銃（九九式短小銃）も與へられた。機關銃の實彈射撃も行ひました。冬にこれを行ひますと、體ちゆうがかあつと熱くなります。すぐ近くに土埃が立ちます。「何をしようか」と鐵兜の上から足で蹴られてふらふらになる。さういふ生活をしてをりましたが、ともかく正規の軍隊にで鍛へられたといふことは、われわれの誇りでした。當時陸軍はまだ陸軍らしかつた。それが

昭和十九年半ばにがらつと變つた。年寄り——と云つても
徵兵令で三十代の人がどつと入つて来て、もう軍隊らしく
なくなりました。

陸軍では、何をやるにもすべて文語文です。「連絡文書を
書け」と言はれば、全部文語文で書く。長い文章を暗記し
ると命じられる。口語文でしたらとても暗記できません。
文語文だからこそ、われわれは澤山の文章を暗記できたの
です。

お配りした資料についてお話しします。

作戰要務令（施行昭和十三年九月二十九日）

（原文の假名はカタ假名）

第一 軍の主とする所は戦闘なり故に百事皆戦闘を以
て基準とすべし而して戦闘一般の目的は敵を壓倒殲
滅して迅速に戦捷を獲得するに在り

第二 戦捷の要は有形無形の各種戦闘要素を綜合して
敵に優る威力を要點に集中發揮せしむるに在り

この「各種戦闘要素を綜合して……威力を要點に集中發
揮せしむる」といふことは、今の經營學でもそのやうに指導

われわれは學科として圖上作戰も学びました。將校訓練
の中では「戰術」といふカリキュラムがありました。敵味
方の状態が圖面に書いてあり、どういふ風に兵を動かすべ
きかを答申する。今で言ふケーススタディです。

文語文には躍動感があり、暗誦するのには眞に具合がよ
い。これが口語文であつたら、さうはいきません。

次に歩兵操典（昭和十九年六月二十一日）。

第一篇第一節は「不動の姿勢」。號令は「氣をつけ」。

第十五 不動の姿勢は軍人基本の姿勢なり故に常に軍
人精神内に充溢し外嚴肅端正ならざるべからず

われわれが九十歳になつた今でも、姿勢よく立つ事がで
きるのは、この教へがあつてこそです。油断すると前かが
みになり老人ぼくなる。姿勢には特に氣をつけなければな
りません。

次は軍人教諭（明治十五年一月四日）です。

これは長い文章ですから、記憶するが大變です。軍人教
諭は教諭教語の中でも異例に屬するほどに長い文章です。

その冒頭に天皇陛下御自ら軍を率ゐるといふ大義が示さ
れてをり、後半に「五箇條の教へ」が述べられてゐます。「五

されてゐるやうです。人・物・金を有効に使つて、一つの
事業が實現されるわけです。

第十 指揮官は軍隊指揮の中樞にして又團結の核心な
り故に常時熾烈なる責任觀念及鞏固なる意思を以て
其の職責を遂行すると共に高邁なる徳性を備へ部下
と苦樂を俱にし率先躬行軍隊の儀表として其の尊信
を受け劍電彈雨の間に立ち勇猛沈著部下をして仰ぎ
て奮勵の重きを感じせしめざるべからず
爲さざると遲疑するとは指揮官の最も戒むべき所と
す

是此の兩者の軍隊を危殆に陥らしむること其の方法
を誤るよりも更に甚だしきものあればなり

これはなかなかの名文だと思ひます。われわれが將校に
任命されたとき、齊しくさう成りたいと念願したものです。

——「常時熾烈なる責任觀念及鞏固なる意思を以て其の職
責を遂行する」「高邁なる徳性を備へ部下と苦樂を俱にし率
先躬行」「勇猛沈著」「爲さざると遲疑するとは指揮官の最
も戒むべき所とす」——もたまたましてゐるのが一番よくな
い。これはなかなかのメッセージです。

箇條」を擧げるに際し、「いでやこれを左に述べん」といふ
一文が入る。これも人を奮ひ立たせる言葉ですね。その
「五箇條」とは、——

- 一つ、軍人は忠節を盡すを本分とすべし
- 一つ、軍人は禮儀を正しくすべし
- 一つ、軍人は武勇を尊ぶべし
- 一つ、軍人は信義を重んずべし
- 一つ、軍人は質素を旨とすべし

これらの「五箇條」の一箇條つづに長い説明があります。
「信義」についての、特に印象に残つてゐるところを奉讀し
ます。

○信義——凡信義を守ること常の道にはあれど、わきて
軍人は信義なくしては一日も隊伍の中に交はりてあら
んこと難かるべし。信とは己が言を踐行ひ義とは己が
分を盡すをいふなり。されば信義を盡さむと思はば、
始より其事を成し得べきか得べからざるかを審に思
考すべし。膽氣なる事を假初に誦ひて、よしなき關係
を結び、後に至りて信義を立てんとすれば、進退谷り

て身の措き所苦しむことあり。悔ゆとも其詮なし。始に能く事の順逆を辨へ、是非を考へ、其言は所詮踐むべからずと知り、其義はとて守るべからずと悟りなば、速に止るこそよけれ。古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を譲り、或は、公道の是非を踏迷ひて私情の信義をまもり、あたら英雄豪傑どもが禍に遭ひ身を滅し、屍の上の汚名を後世まで遺せること其例渺からぬものを。深く警めでやあるべき。

事蹟はこれで終ります。

文中に「あたら英雄豪傑どもが」とありますが、誰の事かと申しますと、まづは西郷隆盛の西南戦争。軍人救論が下賜された明治十五年の五年前のことです。その他に前原一誠の秋の亂。江藤新平の肥後の亂など反逆がありました。さういふことに明治天皇は御心を痛めてをられました。軍人救論は異例な文章だと私は思つてゐます。立憲君主制に於ける帝王が軍人に對して、かやうに細部に互つて懇切丁寧に諭すといふ實例は極めて少ないといへるのではないでせうか。

いろいろ理由が考へられますが、まづ第一は、先ほど申しました西郷隆盛の亂が収まつて間もないこと。それからなさいました。従つて立憲君主制の憲法枠を超えて、時には嚴父の如く、時には慈母の如く、更には心配性のお祖母さんの如く國民に語りかける。その御心のあらはれが軍人救論です。當時の軍人にとつて、生涯の寶であつたと私は思つてゐます。

學徒出陣についてお話いたします。昭和十八年十二月に召集された時、どういふ状態であつたか。それまでは大學を卒業するまでは徴兵が猶豫されてをりました。それが昭和十八年の夏に廢止され、二十歳以上の若者すべてが兵役に就くことになつた。十月に徴兵検査が全國的に行はれ、十二月一日に陸軍に、同月十日に海軍に入隊することになりました。當時は軍機ですから何名入つたといふことは發表されなかつたが、十萬に近かつたと言はれてゐます。學徒兵は全員二等兵（あるいは二等水兵）になりました。

われわれの一期先輩あるいは一期後輩の者は、それぞれ將校になるための即席教育を受けてゐました。われわれの時だけは全員二等兵、二等水兵といふことになつたのです。大變過酷な訓練が待ち受けてゐました。今思へば過酷な訓練を受けたことがわれわれの生涯の寶になつたのです。裁縫・掃除・洗濯等あらゆることをやり、生活力が身に付き

國會が始まつたのが明治二十三年ですので、その八年前といふことになりませう。國會が開かれ、政黨政治が始まる。政黨とは何かと言へば不平分子の集まりである。薩摩と長州が主な所は獨占してゐるからして、他藩出身者には出番がない。

自由黨といふ野黨が、土佐の板垣退助を中心に不平分子を集めてゐる。野黨が選挙に勝つて政權をとり、軍を掌握したら大變だ。さういふことから軍は天皇親政でなければならぬといふ原則の確立が急務となつたのです。軍人救論の冒頭を讀んでみませう。

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある。昔神武天皇躬ら大伴物部の兵どもを率ゐ、中つ國のまつろはぬものどもを討ち平げ給ひ、天下しるしめし給ひしより千五百有餘年を経ぬ。

軍隊の發生の歴史的意義が詳しく述べられてゐます。

日本の天皇は西歐の立憲君主制の枠内には収まつてをりません。それは大御親としての役割があるからです。急を要する場合には立憲君主制の枠を超えて陛下は前にのめり出していろいろのことをなさる。昭和天皇は何度もそれをしました。私などは慶應幼稚舎からの一貫校、家に歸れば女中さんが四人もある、さういふ家でした。ですから軍隊に入らなければ、私などは苦勞知らずの儘に育ち、それこそ碌な人間にならなかつたと思ひます。

話は逸れますが、（これは外國にあるらしいのですが）、大學生になる前の一年間、社會的な活動をする。例へば、農業とか、さまざまな奉仕活動とか、又、自衛隊に入る。一年間、さういふ社會的な訓練を受けることによつて、大學生活ががらりと變る。志を立てることが出来るからです。入社試験の折、自分は何をやってきたかを胸を張つて表明できるし、それが考査の対象にもなります。今、漫然と大學に入學して、漫然と卒業し、漫然と就職試験を受ける學生があまりにも多い。さういふことが無いやうに一年間の修業期間を設けることを提唱したいと思います。

來年（平成二十七年）は、大東亞戦争に負けて七十年になります。戦争に對する當時の學生の意識調査を多くの大學で始めてゐます。

われわれが昭和十八年の十二月に入隊したときの戦局は、既に敗色濃厚でした。山本五十六元帥（聯合艦隊司令長官）は四月に戦死。アッツ島も落ちた。南の島がほとんど落ちて行く。勝ち目は全くないのです。さうした中で多くの學

徒兵は、課せられた運命を淡々と受け入れた。「驅り出された」などと新聞には書いてありますが、さういふ言ひ方は冒瀆です。當時の青年たちは「驅り出された」とは思つてゐない。外敵が我が國に侵入して来る。それを食ひ止めるのがわれわれの務めだと覺悟してゐました。自らの運命を淡々と受け止めた。そのところが大事だと思ふのです。

特攻隊員のメンタリティーには三種類あります。第一は「忠君愛國」の精神を持つてゐた者。パーセンテージは決して多くはなかつた。第二に反逆者もゐた。私と同期の、慶應義塾大學經濟學部の學生だつた、上原良司と云ふのがゐた。彼は特攻で死ぬことについては何の逡巡もなかつた。

しかし彼が残した文章は當時としては不思議なものでした。「俺は自由主義者だ。自由主義を失つた日本は駄目だ。俺は自由主義者として死ぬ。最後までやる」さういふことを堂々と書いてゐる。上原は自己の信條に最後まで忠實でした。第三は「淡々派」です。淡々として運命を受け入れる。これが大多数でした。——特攻機の最後の出撃。エンジンを掛ける。外にはもんぺを穿いた女學生達が壯途を祈つて日の丸を振つてゐる。若い整備兵が身を乗り出して、「何か仰しやることはありませんか」と特攻隊員の最後の言葉を聞かうとする。特攻隊員は何かを言ひ残して、死出の旅に

いよますます之を培養して其原素の發達を助くること
緊要なる可し。

われわれは瘦我慢の精神を忘れてはなりません。私は「常在戰場」、常に戰場にゐるといふ氣持を生進持ち續けたいと念願してをります。

(いしむ こういちろう) 元東京都教育委員會委員、元ブリヂストン専務)

赴くわけです。——かういふ誰かあります。菅原 日本中に風と雷が多くゐました。某といふ中尉が、フードを閉める前に何と言つたか。「おおい風、俺と一緒に死なうぜえ。逃げるなら今のうちぞ」さう言ひ残し、からからと笑つて發つて行つた。——私はこの話が好きです。淡々と運命を受け入れるのが武士道だと思つてゐるからです。

終戦以降、私は小堀桂一郎先生が指摘された「戦後思潮」なるものと闘つてまゐりました。小田村君をはじめ、戦友たちとの連携も續いてゐます。相手は米軍ではなく、左巻きの日本人です。

ところで、日本の戦争文學の代表的なものはと言へば「平家物語」と「太平記」ですね。いづれも負けた側に焦點が當てられてゐます。敗者の美學が語られてゐます。

われわれは、歴史始つて以來の大敗北の淵中にあつた。今私はそれを詩りに思つてゐます。

終りに、福澤諭吉の「瘦我慢の説」(明治二十四年)の一節を掲げます。

一片の瘦我慢は立國の大本として之を重んじ、いよ

深

日本語の泉

山崎 馨

上代特殊假名遣の發見

上代の文獻、『萬葉集』をはじめとする『古事記』『日本書紀』などの文獻において、萬葉假名を用ゐて日本語を書きあらはすときに、そこには平安時代以後には見られない獨特の表記法がありました。それはその表記に音韻上の書き分けがあつたことです。具體的に申しますと、たとへば「君」とか「着る」とかを萬葉假名で書くときに、その「き」「君」とか「着る」とかを萬葉假名で書くときには、それは甲類と呼ばれる文字が用ゐられ、これに対して、たとへば、「木」とか「霧」とかを萬葉假名で書くときには、その「き」には乙類と呼ばれる文字が用ゐられました。さうしてこの二つの類は混同されることがなく、明瞭に書き分けられておりました。

「君」の「き」に乙類の文字が用ゐられたり、「霧」の「き」に甲類の文字が用ゐられたりすることはなかつたのです。それはたとへば、可毛(鴨)と久毛(雲)において、「か」と「く」とが混同されることなく、明瞭に書き分けられてゐたことと同様の、音韻上の書き分けであつたのです。この

論のなかでこの事實を指摘して、數々の實例を示しました。さらにまた、この書き分けが『古事記』だけでなく、『日本書紀』や『萬葉集』にも見られるやうであること、自分が初めて気づいたこの事實が、古語を解釋するときにしばしば有力な手がかりになること、などを述べました。これはまことに優れた劃期的な著眼であり、古代語の研究史上にいまなほ不滅の輝きを放つてゐるのですが、宣長自身はこの問題を深く追究しないままに世を去るのです。宣長の門人石塚龍應は、師の説に基づいて上代の文獻を詳しく研究し、その成果を『假字遣奥山路』三卷(寛政十年、一七九八)にまとめました。そこではア行の工とヤ行のエの區別を明らかにし、『古事記』におけるその書き分けを明示するなどの長所を見せましたが、一方ではその書き分けを又の書き分けと誤認し、『古事記』では子にも書き分けがあるとするなどの短所も含まれておりました。この龍應の研究もまた劃期的な業績であり、大筋においてはいまなほ不滅の功作なのですが、古代日本語における中央語(近畿地方の日本語)と東國方言(靜岡縣濱名湖のあたりから東の日本語)とを等質の資料として扱つた結果、多數の例外が生じることになり、それが災ひしたのか、眞價を知られないままに世に埋れておりました。

のやうな音韻上の書き分けは、どのやうな範囲に見られるのか。ここで五十音圖を思ひ出して下さい。

その五十音圖の上から二つ目の横の並び、イ段音に含まれるキ、ヒ、ミの三音が、前述のやうに甲乙の二類に分れてゐます。また下から二つ目の横の並び、エ段音に含まれるケ、ヘ、メの三音が甲乙の二類に分れてゐます。一番下のオ段ではコ、ソ、ト、ノ、モ、ヨ、ロの七音が甲乙の二類に分れてゐますので、イ段の三音、エ段の三音と合はせて、全部で十三の音が、それぞれ語によつて甲乙二類に書き分けられてゐたことになりました。このうち、濁音がある音、ギ、ビ、ゲ、ベ、ゴ、ゾ、ドの七音にも、甲乙二類の書き分けがありました。

かうして清音十三音、濁音七音、合計二十音に及んで存在した二類の書き分けが、現代日本語に存在しないことは言ふまでもなく、すでに平安時代中期には、この書き分けは完全に消滅しておりました。そこで、後世の日本人は、自分たちの言葉が遠い昔に持つてゐた驚くべき特色に気づくこともないままに、江戸時代後期を迎へてゐたのです。この上代の文獻における書き分けといふ事實に初めて気づいた人は、碩學本居宣長(一七三〇—一八〇一)でした。宣長の慧眼はこの事實を見逃さず、その大作『古事記傳』の總

二十世紀に入り、古代日本語の研究を進めてゐた橋本進吉(一八八二—一九四五)はその研究の途上で龍應の業績を發掘し、それを學界に報告して、周到な批評解説を加へました。かうして龍應の業績は百餘年の後に知己を得たのです。これは、眞に優れた研究が持つてゐる宿命的な一面であつたのかもしれない。その後には發表された橋本進吉の研究が、この書き分けを音韻の差異によるとするに及んで、古代日本語の研究には新時代が到來したのです。

上代特殊假名遣と橋本進吉

すでに本居宣長が示した文字の書き分けとは、たとへば彦とか姫とか書ぶときのヒ、問のヒなどには、比、必、譬などが用ゐられるのに對して、火のヒ、戀のヒなどには、肥、賈、悲などが用ゐられ、子のコ、戀のコなどには、古、孤、固などが用ゐられ、これに對して、心のコ、こそ(助詞)のコなどには、許、己、慮などが用ゐられることを指します。かうした書き分けに用ゐられる文字は、もとよりすべて漢字なのですから、古代日本人がそれを輸入して、日本語を書きあらはすためのかなとして用ゐた時代の漢字音と、その書き分けといふ事實とは、密接に係してゐたはずで、そのことを解明するためには、漢字の中古音の研究、隋、唐

を中心とする時代の音韻體系を知ることが必要でした。前述のやうに、漢字は一字が一音節であり、その一音節は多くは頭子音と韻とに分けられます。その韻の種類には、時間的空間的な差異もあるわけですが、隋の初頭(六〇一)に成った『切韻』の姿を傳へる『廣韻』においては、二百も成った(韻の種類)を設けてあります。前述の十三の音における書き分けは、この漢字音における韻の區別に對應してあります。そこで、古代日本の文献における二類の書き分けは、母音の差によることとなります。ここにおいて、二類の書き分けが見られるイ列、エ列およびオ列には、それぞれ二類の母音があつたことになり、それにア列およびウ列の母音を加へて、古代日本語における八母音の存在が論證されたのです。これに對しては異論も出ておりますが、八母音説はまだ動搖してゐないと考へておきます。

さて、この八母音は、それが發音されるときに、口の中で舌がどの位置にあるかを基準として、左記のやうに三種に分類されます。

奥舌(後舌)二母音 u, o, a

中古母音 i, e, o

前舌母音 i, e

中古母音の音價(實際の發音)については、まだ確定的ではなかついて、上代特殊假名遣と呼びなれば、二類の名も同様について言へば、比、必、譬の類がヒ甲類、肥、費、悲の類がヒ乙類です。橋本進吉によつて開拓された上代特殊假名遣の研究は、その後も進展を重ね、日本語の音韻の歴史、上代の語法、語の意味、文献批判などの研究領域に驚くべき影響と成果とをもたらしたのです。ここに橋本進吉の多數の業績から三點を挙げておきます。

一 國語假名遣研究史上の一瞥見(大正六年、一九一七、日本古典全集「假名遣奥山踏」、「文字及び假名遣の研究」所收)

二 上代の文献に存する特殊の假名遣と當時の語法(昭和六年、一九二七、『國語音韻の発展』所收)

三 古代日本語研究史の上に新しい時代が

開拓されたことを見ておきました。橋本進吉の業績にどのやうな影響があるかは、「文字及び假名遣の研究」の序文に述べられておられます。野村の解説に詳しいのですが、端的に述べると、橋本進吉の業績は、その後も鮮やかな展開を示しました。橋本進吉の代表的な後継者大野晋の業績多數の中から三點を掲げておきます。

1 「上代假名遣の研究」(一九五三、岩波書店)

2 「上代語の訓詁と上代特殊假名遣」(『萬葉集大成』第三卷、一九五四、平凡社)

3 「萬葉時代の音韻」(『萬葉集大成』第六卷、一九五五、平凡社) かうした數々の業績は、上代特殊假名遣が古代語研究のいろいろな部門に、ひろく大きな影響を及ぼすものであることを明らかにしたのであつて、本居宣長の直観が正しかつたことをも證明する結果となりました。(やまざき かをる 神戸大学名誉教授)

ありませんが、三種に分れてゐること自體はまづ確定的でありませんが、三種に分れてゐること自體はまづ確定的であると考えられてゐます。この八母音相互の間には、結合に關する法則、交替に關する法則、連續に關する法則など、さまざまな、整然とした法則がありました。なかでも、結合に關する法則は特に重要です。それがアジア大陸にひろく分布するアルタイ語族(トルコ語族、モンゴル語族、ツングース語族から成る)との間の、注目すべき共通点であることを示してゐたからです。その具體例は、またのちほど紹介させていただきます。日本語とアルタイ語族との比較研究は、すでに百年を越える歴史を経て現在(たとへば福田崑之「日本語とツングース語」一九八八、改訂一九八九)に及んでゐるのですが、日本語がどの系統に屬する言語であるかといふことは、いまだに明らかではありません。しかし、上代特殊假名遣の研究は、この大問題にも影を投げかけ、日本語の起源、日本語の系統論にまでかはつてくるのでした。遠いはるか古代の日本語は遠いはるか古代のアジア大陸のアルタイ語族、なかでもそのツングース語族と親族關係にあるといふ蓋然性を無しとはしないのです。

右に述べてきた二類の書き分けを、橋本進吉による命名などを明らかにし、この事實に基づいて古代日本語の研究を大きく進展させたことです。

萬葉假名によつて表記されたわが古代の文献が、強大な漢字文化圏において生れ出たものであること、また、そこにこのやうな重大な事實が含まれてゐたことは、古代日本語について考へたり解釋したりするときに、決して忘れてはならないことです。特殊假名遣の甲乙二類が種類を異にする音韻であるといふ認識を決して失つてはならないのです。橋本進吉によつて開拓された上代特殊假名遣に關する研究、それを應用した研究は、その後も鮮やかな展開を示しました。橋本進吉の代表的な後継者大野晋の業績多數の中から三點を掲げておきます。

1 「上代假名遣の研究」(一九五三、岩波書店)

2 「上代語の訓詁と上代特殊假名遣」(『萬葉集大成』第三卷、一九五四、平凡社)

3 「萬葉時代の音韻」(『萬葉集大成』第六卷、一九五五、平凡社) かうした數々の業績は、上代特殊假名遣が古代語研究のいろいろな部門に、ひろく大きな影響を及ぼすものであることを明らかにしたのであつて、本居宣長の直観が正しかつたことをも證明する結果となりました。(やまざき かをる 神戸大学名誉教授)

日常語に見られる尺貫法

大喜多俊一

一寸法師の物箱や尺八の語源、疊のサイズ、あるいは一升瓶、また、目方をはかるとかパンを一斤買つてくるなどといふ言ひ方は、どこの家庭でも子供を交へた話題の中で取り上げられることがあるだらう。これは言はずと知れた尺貫法の言葉から理解される内容である。が、昨今では、学校教育でも家庭においてもそのやうな言葉の意味が詳しく指導されることは稀有のことである。昭和三十四年に尺貫法が廢止され、メートル法に統一されたために當然のこととは言はれよう。が、尺貫法は日本古來の度量衡法であるだけに、それに關する言葉が日常の日本語の中で廣い範圍で見られるのはこれまた當り前のはなしである。

ちなみに、疊のサイズを中學生に尋ねてみられよ。恐らく長い邊が一メートル八十センチ、短い邊が九十センチと答へるであらう。それはそれでよいとして、そこから先に、長邊の長さを一間と言ひ、その半分を間中、疊二枚分(二疊)を一坪といふなどと言ひ添へて教へるかどうかが、そこがカギである。それを教へなければ、一寸法師がいかに小さ

に教科書で讀つたことであつた。「足がまあつひの柄かや五尺」(小林一茶『七番日記』)では作者の故郷柏原の雪の深さに關はるといふものである。

場所や位置の、間の長さ(あひだ)に關して言へば、「距離と間隔」といふ言ひ方がまづ想起される。距離は縦に伸びる長さであり、間隔は横に廣がる長さのこと、つまり幅である。距離は六十間が一町で、それが三十六町で一里。ここから上記の「百里云々」の諺が出てくることになる。この諺は正確に言へば『戦國策』に「百里を行く者は九十里を半ばとす」とある。事が九分どほり成つたからとて安心するな、もう一息のところまで一段の努力を集中せよといふ意味である。とかく輕率な行動をしさうな若者には有益な教訓である。これになぞらへてもよいのか、「九切の功を一貫に虧く」といふ諺もある。出典は『書經』。切は高さ・深さを表す單位の語で、『箱根八里』に「萬丈の山千切の谷」とある。ちなみに尋も知つておけば「百尋千尋海の底」「我は海の子」の歌詞の意味も明快に理解できるといふものである。

またさらに、幅は反物の横幅といふ意味で使はれ、鯨尺で約九寸の長さ、一反は長さが二丈八尺である。ふつう一反で成人一人分の着物ができるといはれるが、日常生活の中で着物を着る機會の少ない男性には反物といふ言葉以外

いのか、坪庭の廣さはどれほどなのかがわからない。それに別に不自由もないとはいふものの、長さ・重さ・體積に關する用語についての關心は蓋はれない。諺に「百里の道は九十里が半ば」「一寸の蟲にも五分の魂」などといふ、その眞義も理解ができない。ましてや、疊の面積は間束と間西では異なり、従つて四疊半の部屋といつても同じ廣さではない、といふ違ひがあり、部屋を借りる時に思案することも起るであらう。

二

そこで、今、あらためて尺貫法で言ふ用語や事柄について、最低はこれくらゐは子供の時から知つてをれば、なにかと至便だと思はれる事項を、日常の生活の中から取り出し、それをぜひ子供の平素の學習として、主として國語と算數の時間にでも、まとめて扱ふ必要があるのではないかと提案してみた。

まづは長さの單位である。基本は尺で、その十分の一が寸、そのまた十分の一が分である。そのやうなことは大人にしては常識なので、まとめて示すのも躊躇されるところだが、子供はそれを知らない。一間は六尺であり、尺の十倍は丈で、奈良東大寺の大佛像は五丈三尺だと小學生の時にはあまり關係ないものかもしれない。鯨尺に對して曲尺といふ、鯨尺の八寸を一尺とした長さの單位もある。そのやうなことは教へられないとわからない。また、長さの平方として、田畑や土地の面積を表す單位とし、歩・段(反)・畝町がある。農地や山林のこと、あるいは住宅建設に關はつて、關係者はよく使ふ言葉である。

三

次は體積・容積を表す單位の言葉である。基本は升で、一升瓶が今も日々使はれてゐるのはだれもがよく知つてゐるとほりである。升の十分の一が合、そのまた十分の一が勺である。ここでわれわれの世代(八十歳以上の者)にとつてはかつての嚴しかつた食料難時代を想起させる言葉が登場する。「二合三勺」である。昭和十年代の後半、米穀類の配給制度が實施され、普通の大人一日の割當てがわづかにそのやうな少量に制限されてゐた事象である。他にこれといつて目だつた食料もなかつた、ひもじく、辛い時代のことである。肉體勞動者には査定があつて、四合の割當てとなつてゐたのも何か悲しい事實。そんな事態を凌いで生きてきた者が、今、杖朝(八十歳)の年齢になつてゐる。思へば、薄き幸せ、といふか、感無量である。土一升金一升と

いふ時代を経験してきた人もある。

升の十倍が斗、その十倍が石である。斗は北斗七星の斗で、斗は柄杓型の杓のこと。鏡開きに四斗樽を使うことが多い。石とは斛の字がもとで、これは口が小さく、底が大きい四角い杓のことである。石高、加賀百萬石、三十石船などが耳なれた言葉である。斗も斛もともと容量を表す杓のことであるが、昨今人名に「斗」の字がしばしば用ゐられるのは「と」の音を表すのに使はれるためなのか、その音を好むものの、思ひが適ふ漢字が少ないためなのか、よくわからない。

四

尺貫法の第三は、質量・重量を表す単位である。ベースは貫で、その千分の一が一匁である。裸一貫、看貫秤・棹秤、花一匁などがよく使はれる用例である。特に看貫秤に關して「カンカンのにのる」とは幼児語のやうに聞えたり、今日禁句の「百貫でぶ」といふ表現をよく使つた子供があたりした。貫と匁の間に斤といふ單位があり、これが現在も残つてゐて、しばしばパンや砂糖の重さを計るのに使はれてゐる。

斤はむかし中國の唐代に使はれてゐた單位とされるが、

どうして「斤」が「貫」となつたか。

〔註〕無門關：一卷。宋の無門慧開が古來からの公案四十八を選び、評釋した書物、十卷。

碧巖錄：佛書。十卷。宋の圓悟が百則の頌古

に垂示・評唱・著語を加へたもの。

五

右に、尺貫法に關する幾つかの用語や語、俳句などを舉げてみた。そんな中で、最も多く用ゐられる語や文字と言へば、何といつても「寸」を含む二字の熟語ではないかと思はれる。寸時・寸暇・寸志・寸言・寸劇・寸鐵・寸秒・寸陰など枚舉にいとまがない。「一寸」と書き「ちよつ」とよまれることもあり、また四字熟語では「寸善尺魔」「寸馬豆人」といふものもある。いづれにしても寸がわづかなことを表してをり、古來、人がほんの少しのことに腐心し、表現に工夫を凝らしてきたことが理解できる。それらの表現をもとに、尺貫法の言葉に親しむことができであらう。

江戸中期の俳人横井也右は俳文「領衣」の中で、「長短の解」と題して「世に式法をこまかに定めて、かね合極ま

その重さには、日本で使はれるやうになつてからも、數値に微妙な變動があり、端數でもあつて、使ひにくいものなのだが、なぜか今日においても、パンと砂糖の計量の中に生きてゐる。中間として有用なのであらうか。メートル法で言へば、約六百グラムである。

ところで、斤に關する次の禪問答をご存じであらうか。斤は重いのか軽いのかを考へさせられるもので、コンニャク問答として知つておきたいはなしの一つである。

それは「麻三斤」といふ言葉である。麻は三斤で僧衣一着分がつくれるといはれる。ある僧が「佛とはいかなるものか」と問ふ。それに對して「三斤ほどの麻つてくらゐのものだ」と洞山禪師が答へる。これは「無門關」や「碧巖錄」に見られる有名な公案「禪宗で、參禪者を悟りに導くたに與へる課題」である。佛とは何かといふ質問には、そもそもだれも答へられるわけがない。佛はわれわれの世界、みんなの宇宙であるのか、またわれわれ自身であるのか。さういふ質問は要は自分自身に選つていかねばならないのであらう。だが、その質問をした人の趣意をはぐらかすことができず、答へるとすれば、「麻三斤」といふ答へにならうといふ事情である。これは大人の問答で、ここまでは子供は知らなくてよいだらうが、あへて數値に搖れのある「斤」

も物もあれど、其むつかしき境は人の製作なり。大地とも窮屈ならじ。長短は自然にそなへて寸分の詮議なし」などと言つて固定觀念の打破について語つてゐる。また芥川龍之介は書句集『株儒の言葉』で、「天才とは僅かに我々と一歩隔てたものである。只この一歩を理解するため百里の半ばを九十九里とする超數學を知らなければならぬ」と言つてゐる。ともにこれなき明言で、含蓄深く、おもしろい。

六

さて、わが國においては尺貫法が單位の中心であつた時、十八世紀末、フランスで提唱されたのが十進法による單位系で、これがメートル法のもととなり、一九六〇年、國際度量衡總會で國際單位系採用の決議となつた。その、フランスでメートル法が云々され出した頃、わが國においては早くも「メートル」なる語が、福澤諭吉の『西洋事情』や夏目漱石の『吾輩は猫である』の著述にも見えてゐるのは注目される。その頃、西洋の地名や文物を漢字で表さうといふ傾向が廣がり、例へば、フランスは「佛蘭西」、アメリカは「亜米利加」といふやうな表記がなされるやうになつてゐた。それにあやかつてか、メートルはフランスの發音に

準じて「米突」、グラムは「瓦」のやうに表記され、のちに「米」は一字で「メートル」とよまれるやうになり、旺（キログラム）、糧（センチメートル）、立（リットル）などの漢字も広く使われるやうになつていく。

そのやうな表記が適切であるかどうかは別にして、問題はこれらの表記が、今日の青少年には讀めなくなつてゐるといふのが現實である。これは尺貫法の理解とは別の問題ながら、今、あらためて、氣がかりになるところではある。この際、このことも含めて、尺貫法の名残として囃如として生きている言葉を見つめながら、併せて傳達と指導の方策を考へる必要がある内容だと思はれる。いかがなものであらうか。

以上、提言と所見まで、卑見を述べる次第である。

（おほきた しゅんいち 元京都市教育委員會議長）

縦書きの意識と感覺（その六）

若井勲夫

一戸から九戸へ

岩手縣北部に一戸町、二戸市、九戸村、青森縣東南部に四戸を除いて三戸から七戸の町、八戸市がある。この「戸」にどのやうな意味があるのだらうか。諸説があるが、一般的には、この地域は古く糠部郡と稱し、鎌倉時代初期に南部氏が馬産の牧場経営により郡内を東西南北の四門、一戸から九戸に至る九ヶ戸（部）の門戸制を敷き、一つの戸に一牧場七村を置いたことに由来すると言はれる。また、單に地元特有の行政区畫の名稱といふ説もある（なほ、現在、四戸がないのは戦國時代に四戸南部氏が亂を起し、江戸時代初めにその呼び名が消滅したことによる。同音の「死」を嫌つたからではない。元の四戸は今の八戸市南郷區、三戸郡南部町に當る）。

さて、ここで問題は、この數字の付け方である。戸の付く市町村を現在の地圖上落していくと、南から北へ一戸から六戸まで順に延び、七戸はやや北西に傾く。次に、八戸は東に向いて進み、南下して九戸に至る。この動きはお

ほむね時計廻りであり、右廻りである。この廻り方は日時計の運行に基づいてゐて、馴染み深いものである。以前にも觸れたが、佛教寺院での儀式も本尊を中心に右に巡り歩く。これは表記法で言へば、縦書きと根柢において同じである。馬を飼育する周圍を圍つた柵の柵が右廻りに從つて置かれたところに、古くからの縦書きの感覺が生きてゐると解釋できるのではないだらうか。

ジグザグの構圖

江戸時代後期に岸連山といふ畫家が描いた「諸葛孔明圖」が京都市學校歴史博物館に所藏されてゐる。これは軸装で、孔明が行列を組んで進んで行く繪である。縦長の狭い畫面にどのやうな進行の仕方描くかが畫家の腕の見せどころである。この構圖は左上から斜めに右中へ、そして再び斜めに左下へと、Z字形に折れ曲つて進む。このやうに行列を長くして、奥行きを持たせ、力強く動いて行く様子をうまく表現してゐる。この描き方はやはり右廻りの縦書きの方向である。もしこれが逆であれば、どのやうな印象を與へるだらうか。平假名の「く」と同じ進行では左から右へ進むので、退行、逆行となり、順調に進まない。活動は阻害され、息が詰るやうな停滯感が漂ふ。この筆の進め方は圓

流

の書き方と同じである。圓は一般的には右廻りで、これがごく自然な筆法である。縦書きは文筆を書く時だけの作法ではなく、縦意識、縦感覚と言つてよいほど、日本人の行動や時間の進み方(一例が繪巻物。既述)に深く關はつてゐる。なほ、参考のために漫畫家、手塚治麿氏の「冒険の海え(ママ)」「新寶島」冒頭、昭和二十二年)の畫布を取上げる(産経新聞、大阪、夕刊。平成二十六年七月十二日附)。少年が進轉するオーブンカーが「右奥から左手前に走」る、次に「左奥へと走り去り」、さらに「真正面からとらえた圓」、そして「左へ走る車を眞横からとらえる」。「目まぐるしい視點の変化で車のスピード感を描き切つてゐる」が、ここではすべて右から左への、縦書きによる運行であることに着目すべきである。(ちなみに、漫畫の駒削りは現代も縦書きで、順序の番號を付けなくても讀める。既述)

朝日新聞の調査

朝日新聞の「between 讀者とつくる」(平成二十四年十月二十七日附)で「縦書きするのは苦手?」と題する特集記事が掲載された。いかにもマスコミらしい右の問ひに對して、肯定と否定は五十一%と四十九%で、ほぼ二分した。回答者數三千人で、その理由を三つまで選擇する、その理

由の十%以上を挙げると次の通りである。苦手の肯定者は「横書きの方が自然」三十四%、「スラスラ書けない」二十四%、「見た目がよくない」十二%、「手や目が楽」「面倒くさい」が各十一%。一方、「縦書きの方が自然」二十七%、「見た目がよい」十五%、「文章が整然となる」十四%。こゝから判斷すると、横書き者は印象や感で、また縦と比べて消極的に横を支持してゐるのに、縦書き者は縦そのものに國語としてのあり方や文章の纏りを積極的に認めてゐるといふ違ひがある。また全員の答で、「讀みやすい」のは横二十一%、縦三十四%、「出版物がやがて横主流になる」が肯定十五%、否定四十三%で、縦書きが讀みやすく、國語としての變らぬ基準であると認識されてゐる。

また、個々の意見では、横書き者はパソコンやメールなど機器に頼つて縦書きから變更したと經驗を述べるに止る。一方、縦書き者は「大学時代に縦書きの言語文化は稀少だと教はつてから、誇りに思つて續けて——縦に書くと気分も引き締まる」と本質的に答へる。書家の石川九樹氏も「縦書きは億劫で気が重い。しかし、その重さと格闘しながら書くからこそ文章が確かな意味を持つ」と持論を述べ、縦書きの重厚で論理性を持つ價値を指摘する。これを受けて、記者も「ここぞというとき、決め手になるのは縦書きなの

だ」と結ばざるを得なくなった(なほ、この記事に私も取材を受け、意見が四十行にわたつて正確に纏められてゐる)。

携帯やスマホの讀書き

携帯やスマホの流行によつて横書きの文筆が横行してゐる。このことはワープロやパソコンもさうであつたが、こちらは縦書きでも入力できる。しかし、前者は横書きでしか使はず、いはば横書き、横讀みの強制である。もともと國語の假名や漢字の文字は縦に書きやすく、縦に讀みやすいやうにできてゐる。その上、上から下へ、續いて、右から左へと書き、讀んでいく方法は日本人にとつて自然な理に納つた流れである。ところが、その進み方に逆らふやうに、本来、縦であるべきものを絶えず行替へを繰返し、横に書物へて入力し、横に讀んでいくことを常に續けていくと、將來、力のやうな結果を來すだらうか。

それは、狭い畫面を使ふことによつて、目が疲れ、視力障礙が起るといふ肉體的な影響だけではない。既述の通り、横書きは既述で、輪りや緊張を缺いて擴散するばかりである。さらに、思考が集中せず、心情の深まりや豊かさが足らず、故に人はなれていく。音楽家の嘉納愛子氏は山田耕

れた詩は横書きだけれども、日本歌曲の詩を理解するには縦書きにして何度も読まないといけないとやかましく言われた」と語る(産経新聞、平成二十七年二月一日附)。横の讀み書きは根源の思考や情緒のはたらきの質を低下させ、劣化させる。この明確な影響はまだ出てゐないと思はれるが、長い目で見れば、日本人の精神の構造や感情の仕組が變質するのではないかと憂ふ。

(わかぬ いさを 京都産業大學名譽教授)

読

水谷静夫の危惧

上田博和

水谷静夫は戦後の國語施策を批判した数少ない國語學者である。送假名については、『送り仮名法資料集』（一九五二年）を編纂し、國語審議會の建議（一九五八年）を分析し、内閣告示（一九五九年）を論評した。最後のは著作目録（計皇國語学「二〇一四年九月」）に無いから、紹介しよう。

「掛」といふ字はこれで「かける」「かかる」なのであって、「か」と讀む字なのではない。……ところが小学生などには、「掛ける」「掛る」「明けける」「明るい」「明か」のように、同じ字が幾通りもの讀み方を持つのは覚えにくいとして、漢字に受け持たせる訓讀みの音節をなるべく一定にしようという方針が、戰爭中に現れた。……文部當局が「子供のため」という大義名分によって、折角出来かけていた表記の慣用を壊す方向に進んで招いた混亂の、底の淺い收拾策と見られなくもない。

「送りがなのつけ方」の問題点「國文學解釋と鑑賞」
1959.9)

「くがいただく」となつてゐる。

同様の例「大變光榮なことは、天皇、皇后兩陛下が皇太子向妃殿下時代から毎回授賞式にご出席いただいたことである」（九〇頁）について「私と同年配の某著名財界人まで、平氣で公のところどころこんな言葉遣いをするようになったというのが、大変な問題であつて、日本語が曲り角に来てゐる証拠」（九二、九三頁）だと言ふ。

本書をパソコンで検索すると、壓倒的多数が「曲がり角の日本語」である。「曲る」を「曲がる」と送り損ねる内田百閒以來の譯説が戦中戦後に繼承され、今や固有名詞をも改變する。彼らは誤表記を正したつもりかも知れない。

（うへだ・ひろかず 本會理事）

國語問題協議會が依頼した講演會の講師は、體調叶はず實現しなかつた。まもなく刊行された『曲り角の日本語』（岩波新書二〇一一年四月）で水谷氏は「はは」の年老いたのが「ばば」なのとパラレルに「ちち」の年老いたのが「ぢぢ」であるべきに、〈現代語言に基づいた〉現代仮名遣いでは「じじ」だ。（前説Ⅱ）と指摘して、「語彙に存する組織的關係の破壊」と評した。大正末期の假名遣改定案の「ぢぢ」の廢止について、芥川龍之介が「葉茶屋」を「菓じや屋」と書かせるのは「理性の尊嚴の無視」と歎いたのと軌を一にする。

水谷静夫の危惧は昨今の「いただく」の誤用に發してゐる。水谷氏曰く、動作者から見ても「くくださる」「受ける方から見たら」「いただく」、つまり「くがくださる」「くがいただく」であるが、「くがくださる」即ち「行爲主體体を奉る」のが敬語としては本來の形であつて、「いちいち私がしゃしゃり出て、「いただく」「いただく」という必要はない」（九二頁）。さらに、論文謝辭「〇〇先生がこの問題について懇切に指導していただいたことを感謝します」（八八頁）について「いただく」を生かすなら「〇〇先生に、「先生が」を生かすなら「御指導くださった」でなければいけないと指摘する。ここでは「くがくださる」でも「くがいただく」でもなく

梁

日本文藝復興の提唱(一)

現代日本語文化への文語の役割

市川 浩

本稿は平成二十七年五月二十八日 田無公民館にて行はれた東京雜學大學での講演の要約である。

急速に進む少数言語の絶滅 日本語が生き残るには

三年前、この東京雜學大學で「國語へのかなしみ」と題して日本の文化としての國語に就いて申上げた。今回は現實生活に於ける文語の役割に就いて御話したい。

世界的に見ると日本語は現在國連は勿論、東南アジア諸國連合(ASEAN)でさへ公用語にはなつてゐない。日本人による學術論文は英語など「公用語」で發表しなければ、世界的評價を期待できない。となれば言語能力習得は幼少期が最適と、小學校での英語必修が多くの有識者の反對を押切つて進められ、世間も此を容認してゐる。その背景には、日本語は別に學校で教へなくても話すのに不自由しないから、國語の時間を少々削つてもいいではないかといふことがある。

れてきたことは前回御話した通りである。此の獨立といふこと、實は單なる發音と表記といふ側面のみならず、日本人の生活に深く根ざしてゐる。古くは相聞歌に代表せらるゝ歌の遣り取りから、江戸骨牌に言ふ「文は遣りたし書く手は持たず」は近代に於ても體文の代筆が學費稼ぎの一翼を擔つて來たし、戦後七十年を経た今日でも例へば、長年連れ添つた伴侶や、一人前に育て、頂いた親や先生への感謝の氣持を、手紙の書き言葉を読み上げたの表現が當事者のみならず周囲の感動を呼ぶ事も多い。これは洋の東西を問はず、他の多くの民族が話し言葉で思ひを率直に傳へると、明らかに異つた文化たる所以ではあるが話し言葉の發達が後れてゐるとも言へる。

「言文一致」と「口語文」の誕生再考

紋上の文化意識に變化が生じたのは明治以降の「言文一致」と「口語文」といふ二つの新語によるものであつた。但し「言文一致」は言語の理想を示すかの如くして、實態は會話部分のみ直接話法に描寫し、地の部分は從來通りの文語文であつたし、「口語文」も西歐語の翻譯などのために文語文から派生した書き言葉であつた。それゆゑ明治後半から大正昭和にかけて、嚆外、漱石を始め多く

又次代を擔ふ若者が英語など世界主要言語を學んだ方が將來に役立つといふ事情には勝てないのが現状であらう。既に例へば「あふひのうへ」で何ですか、讀めませんと言へば言つた者勝ちの現状はかなり深刻であると言はねばならない。

科學技術の發達に伴ふ環境變化に應じて、動植物の種の多様性の保存が叫ばれ、絶滅危懼種への保護などが話題になるのに、言語の多様性を保存しようとする動きが殆どないのは、自國語消滅への危機感が當事者に稀薄なこともその一因である。今の日本人で日本語の消滅を心配する人など先づゐまい。しかし一旦消滅への傾向が見えた時には時已に晩く狂亂を既倒に廻らすことはできず、自國文化の傳承不能となるだけでなく、世界語を母國語とする人達との教養格差と戦はねばならぬこと、最近の攜帶端末の開發で、我が國が常に後れを取つてゐる点からも容易に察せられよう。

獨立の書き言葉を持つ言語文化の繼承

日本語を言語文化として見る時、最大の特徴は書言の獨立である。この書き言葉獨立は日本語の歴史の中核をなすものであり、藤原定家や契沖の功績が代々水継が

の作家がこの新しい文體での文學作品の創作に注力し、さらに映畫や舞臺での科白に正式の口語體が用ゐられたことで大いに口語體の普及が進んだ。その結果手紙の類も候文から口語體への移行が可能となつた。

このやうに「口語文」は「口語體」による書き言葉であり、話し言葉の文章ではない。然るに「口語文」といふ名稱からこれを話し言葉の記録といふ意味合ひが生じた。即ちそれまでの寧ろ「書くやうに話す」から「話すやうに書く」への變革が特に戦後行政による國語政策の基本となつた。今日では意思推量の「う」は推量に使つてはならず、皇室敬語は「れる」「られる」に限るなど、文章の隅々にまで寧ろ戦前よりも酷しい表現規制が行はれてゐる。文章表現の工夫なども「美文調」等と言つて排斥する風潮さへあるのは、文字は音聲言語を記述する道具に過ぎぬとする西洋言語學の影響もあらう。

萩原朝太郎、宮澤賢治による文語への回歸

順調な歩みを進めてゐた口語體は更に詩の世界に廣がつた。萩原朝太郎は大正六年(一九一七)「月に吠える」で口語詩の狼煙を上げ、これに觸發された宮澤賢治は翌七年同じく口語詩「雙子の星」、同十三年「春と修羅」を

發表、口語詩の時代が開いた。しかし賢治は生涯の作品を百五十篇の文語詩に凝縮させて昭和八年(一九三三)世を去り、朔太郎も何となくけだるい(アンニユイ)の気分には口語詩は偶然効果を上げたが、心の絶叫を表はすには文語詩によるしかないとして最後の文語詩集「水島」を發表し、日本への回帰を呼掛ける。

この時朔太郎が指摘した口語體の問題點は

一、抑揚のない、ネバネバした蜘蛛の巣のからみつくやうな文體

二、NO、YESの決定が章句の最後に来るため、「断じて」、「全然」など打消先行副詞の活用

三、感覺的に強い表現のためには促音と拗音に富む漢語の利用が不可缺

の三點であつたが、朔太郎は昭和十七年(一九四二)歿し、問題は今日なほ未解決である。

新しい文體への挑戦

朔太郎の提起した口語體の問題點はさすがに本質を衝いたものであつたが、夫々

一、終止形と連體形の同形化により、本來言切るべき箇所、體言や「の」などの助詞を接続させる傾向

二、「断じて…守抜く」、「全然…良くなつた」など肯定的使用の容認でNO、YESの豫想が更に困難化

三、行政的に漢語の使用を制限

などの問題點を孕み、解決が困難である。元々口語體劃出の動機からして、詩の世界とは異り、普通文を唯文語體にするだけでは問題の解決にはならない。従つて我々はもう一度口語體の出發點に立戻つて新しい文體の建設を検討する必要がある。その中心となるのは、先行シテムである文語體の再活用である。文語、口語兩者の違ひに注目すると、以下の三點が擧げられよう。

一、二段、サ變、ラ變動詞(終止連體別形)の有無

二、助動詞の數

三、時制の有無

第一の二段、サ變、ラ變動詞を終止連體別形の問題と考へる時、終止形に限り文語形を復活せしめるのが一案である。「考ふ」と結べば完結し、「考ふべし」との連結も圓滑化する。これに依り「考へる」を連體形として語感的にも、文法的に特化する事ができる。

第二の助動詞では、口語體で消滅した文語助動詞は殆どが終止連體別形であり、特に數も多く、終止連體同形の四段活用動詞の文末に接続して言切りを補助してゐる。

その意味で別形の「なり」、「たり」を形容動詞及び断定の助動詞として復活させることができよう。「思ふ」は單獨では言切り難いが、「思ふなり」、「思ひたり」で結び、断定を強調することができる。

第三の時制は日本語には本來なく、文語體に於ける「過去の助動詞」と言はれるものは、以前の出來事に對する完了、存続、回想などの感懷を表はし、時制の動きは殆どない。口語體の「た」、「だ」は元來英語の過去形表現の譯語としての意味合ひが大きく、従つて叮嚀表現の「です」、「ます」との關係も十分でない。「です」は形容動詞の活用語尾としてのみ「だ」と完全對雅應するが、その他の活用語には接続困難である。形容詞に「です」をつける問題では、「でした」が無理無く接続する場合のみ「です」の接続を認めるといふのが私見である。「大きいです」は「これか」らの敬語(昭和二十七年)で推奨してゐるが、「大きいでした」も「大きかつたでした」も無理があり、使用すべきでないと思ふ。「御早う御座います」の形が正しく無理がなく、関西にて用ゐる「おます」と共に使用を推奨したい。なほ、「飛ぶでせう」、「早いでせう」などは正しく無理がないが、これは助動詞ではなく、推奨、同意誘導の終助詞と見るべきであらう。

また「ます」は動詞連用形に附いて無理無く、連體形「まする」の一般化により終止形との別形化が確立すれば利用範圍の擴大が期待できる。

文語體の活用に歴史的假名遣は不可缺

以上口語體の弱點を文語體の再活用により補ふ可能性はかなり有望であることを述べてきたが、ここで問題になるのが假名遣である。文語體に「現代假名遣い」を使用せば、文語を破壊することは明らかであり、何としても避けねばならぬ。幸ひ「現代假名遣い」は「個々人の表記にまで及さない」ことを前書で明記してをり、従つて新文體の建設は歴史的假名遣を基礎として個々人の創意工夫により成し遂げねばならない。かくて新文體は大正末期の口語體に代る「第二口語體」として「現代假名遣い」等の桎梏を免れ、文語體と表記を共有することで、文語、漢語の連繫による、専門外でも理解可能の日本語獨特の造語能力を復活せしめることができる。さうしてこれが日常の話し言葉の洗練に繋がつた暁には、日本語絶滅の危機を回避できるだけでなく、人類共通の公用語への道も開けるであらう。

まだ窗外の寒いころ、雑誌で「川賣(かおれ)梅林」の案内を見かけた。地圖で調べたら濱名湖のずっと北あたり、愛知縣新城市にあるといふ。しかし一般に「かおれ」地名は岐阜縣に多く分布する。

登山家ならずとも「川上(かおれ)岳」は有名であらうか。また川浦(かおれ)溪谷・川浦ダムも景勝地らしい。検索すると馬瀬川上(ませかおれ)、阿木川上(あぎかおれ)といった地名があがってくる。これらの地名はいづれも川上や水源地に位置し、古語で樹木の尖端を意味する「うれ(末)」が語源なのだといふ。事實とすれば、萬葉の頃に遡る言葉が今に保存されてゐる事になる。

とすれば假名遣は「かふれ」なのだらうか。梢を意味する「こぬれ」は「木+の+うれ」である。また「河内」は今でこそウ音便の「かうち」だが、上代は「かふち」であった。百人一首の「凡河内躬恆」は「おほしかふちのみつね」である。もっとも「かは+うれ」といふ語源説が正しくし

かもこの地名が上代に成立してゐればといふ前提なので、この種の結論は下せない事が多い。たとへば「箕面市」は「水の尾」で「みのを」ではないかと個人的に思ふのだが、「和字正漢抄」には「箕+の+おも」ゆゑ「みのお」とある。典籍は特に示してない。

どうも漢字の標準的な音訓に合つてゐればよしとされるではないか。「をしゃまんべ(長萬部)・オサマムベツ」(うらじほ(浦鹽斯德)・ウラジオストク)などは明らかに「誤つた回歸」に當るが、だからといってどこまで否定してよいか何とも言へない。うるさく穿鑿し始めるとすぐ袋小路に陥る言葉は多い。

これは現代假名遣も同じである。「東さん」は「アズマ」と書かれても平氣だが、「吾妻さん」は嫌がりさうな氣がする。「具合」を「ぐわい」とすればきつと笑はれるが、澤庵漬は漢字から離れると「タクワン」で平氣だ。漢字と結びついた言葉は「發音どほり」でもないのである。

「箕面」が「みのお」でよしとするなら、「川賣・川上・川浦」いづれも「かおれ」とするのが結局は無難であらうか。

(たかさき いちろう 齒科醫・本會評議員)

神祕なる國の神祕なる言語

高田 友

昭和の御世とおぼゆるが、或時、NHKテレビのパラエティ番組にて、蟲の「すだく」なる動詞を探り上げ、アナウンサー、「『聞く』の意と誤解する者多かれども、眞は『集まる』の意なり」と漢蕃を傾けたる後、「日本語は斯も難しきかな。我ら、平易なる言葉を使ふべく努力せずんばあらざるなり」と要らざる一言を漏したり。

これを聞き、怒りを發したまへるは、さる女流小説家。田邊聖子氏なりしかと記憶す。「さやうなことをいはんには、由緒ある言葉は一切使ふべからずといふに異ならず」と新聞に投稿せられて、暫く言論界を賑はせたり。

ああ、これぞげに戦後の文化頽廢の窮りたる所にてある。「平易なる言葉を使はずんばあらず」といふ輕佻浮薄なる半可通の妄言に據りて、日本語は破壊せられ來れるなり。

この類の徒は「話すやうに書け」と言ひ、修辭を輕んず。心に思ひたるままに文章にせよ、言葉を練るの要なし、との謂ひなり。「口調よき文は時代錯誤なり」との批判も耳にせしことあり。戦前の陸海軍、口調よき文語文を戦意厚

揚に利用したるは事實なりと雖も、何爲それより出でて「口調よきは軍國主義」と荒唐無稽なる結論を導き出すを得ん。表音派の主張に言へるあり。「言葉はそもそも話し言葉より始まりたり。書き言葉は補充的存在に過ぎず。聞きて判るに非ずば、本来の言語の意義を没却す」と。

然り、言語は太古には話し言葉のみなりき。然れども忘るるなかれ、書き言葉を創出したるに據りて、言語は一段と進化したり。

書き言葉の創出、換言すれば文字の發明に由りて、人類は、腦内に浮びたる思想を、生のままに表出するに非ずして、一旦書寫したる後に整然たる形態に整ふることを得たり。これ即ち「推敲」なり。かくて、言語はパージョンアップせられたるなり。粗野なる言語、洗練せられたり。

文字の發明せられたればこそ、言語を記録するを得るに至りしか。人類は、文字のなかりし時代の言語を記憶せず。口傳の傳承ありと雖も、これまた後に文字に寫さざらましかば、何を以てか現今に其の影を留むるあらん。文字に據りて、先祖の記憶の蓄積始まる。斯る蓄積なん言葉を豊かならしめ、知的なる表現を可能ならしめたる。今、表音派は、國民に向ひて、日常語のみを用ゐるべしと訓戒す。古語及び詩歌の格調高き表現を國民腦裡のポキヤプラーリよ

り放逐すべしとの訓ひなり。該アナンサーも然言へり。何を以てか、此の如き愚を旨指す。民主的なる印象を與へんと畫策するらめど、その傳に據らば、善積を抛棄して、原始時代の文化に回歸するに如かざるべし。

而して、日本人は茲に更に一段の跳躍を爲せり。同じ漢字を状況に應じて異なる様に發音し分け、翻りて、同じ發音に様々なる漢字を宛てて、パーシジョンアツプを取行せり。

新聞に大學教授の寄稿するありて、『妖しい』と『怪しい』は全く異なる語なり。然るに、いづれも『あやしい』と訓み、漢字を以て區別するとは異様なる事態なり。發音同じくして、文字を見ざれば理解するを得ざる表記は日本語の缺陷なり。新たに、別個の單語を作り出すべし」と。

已哉 言葉とは、提案する人ありて成れるものなりしか。

「小保方さんのあやしい魅力」と口にするに於ては、脳内にすでに「妖」の字の泛々あり。「高田さんのあやしげなる文語文法」と言へば、則ち既に「怪」の字を意識してあり。表音派の人々の、なにゆゑに、かかる日本語獨特の意識を輕侮彈劾せんと足掻くや、我が理解の及ぶ所にあらず。他の言語に存在せざる現象なるによりて、理に合はずとの意なるか。寧ろ、世界に冠たる、この妖しき、宇宙的規模なる現象を誇りにすべしと思はるるに。

の彼方なる高天原より飛來したるの證左ならずや。

今、試みに手許の國語辭典を検索するに、現代假名遣にて、「コウトウ」なる語は二十項目を數ふ。これを以て、表音派は、「聽いて判らぬ言葉、文字を見ざれば理解し得ざる言語」と日本語を誹謗す。

さにあらず。日本人は、「コウトウの委員長」と耳にしたれば、忽ちに、腦裡に「公黨」なる漢字のイメージを思ひ浮ぶるなり。アクセントの區別だになきに、同音異義語を、目を用ゐずして字形に據りて判別す。西歐人よ。形なき抽象名詞に形を與ふる民族ありと知るべし。(中國人も然あれど、日本人の徹底ぶりには遠く及ばず。中國語には聲調ありて、發音し分くるに由りて、脳内に字形の泛々閑なし) 嗚呼、神祕なる國の神祕なる言語。言葉の幸ふ國とは海に我が神州をぞ言ひたりける。

進歩的なる人々は、何事につけ、日本が外國と異なる點は、悉皆、外國に效ひて修正すべしと唱ふ。

歐米人の、自らは血の滴るピフテキを吸ひつつ、日本人に向ひて、鯨を食ふは野蠻なれば停止すべしと強ふるは、理不盡の極みにあらずや。然るに、さる新聞のコラムは、「國際親善の爲なれば、鯨を食ふが如きは断念するに如かず」と阿諛追從に淫す。日本人たるに劣等感を抱くなり。

漢字と假名を見事に連結せしめたる日本語の表記は世界遺産たるべき餘しき文化なり。「とる」に該る漢字は「取・執・撮・採・獲・捕・撮・盜」と限りなし。さる外國人に説明したれば、只管目を丸くして驚きぬたり。

「その昔、日本人は同じ語の異なる意味に、様々なる漢字を宛てたるによりて、發音を區別するの要を感じざるに至る。これが爲に、語法の分化、未熟のままに墾りたり」との批判あり。敢へて頓珍漢なる諺言とは言はじ。漢字の到來なからましかば、「とる」「あやしい」の色々なる意味には、各々を表はす數多の單語熟語の誕生したるに相違なし。「とる」に近き英單語は豊富なるらん。英米人は、to out, to out, etc. など副詞を補ひて、何より様々なる熟語を發生せしめたり。日本語は斯るレベルには達せざりき。吾等の儘にて、數多の意味を表はすに似たり。然りと雖も、此のゆゑを以て、日本語を未開なる言語と看做すなかれ。

日本語は、代替として、漢字を導入し、頭の中に、同じ發音の單語を分別するなる神業を成し遂げたり。言語は、音聲と文字にて成立すと言はるるに、獨り日本語は、之に加へて、己の腦のイメージを直接に聞く人の腦に送り、新たなイメージを造り出さしむるなり。日本語は地球一般の言語とは趣を異にす。嗚呼、是定に、我が祖先の、冥王星

軍備なき國家は存立するを得ざるに、本朝には、かつて非武裝中立論席捲するあり。「日本人は格別に劣等なる民族なれば、軍備を保有する資格なし」との理に基つきたり。今、傳統文化を愛する人々は、正漢字、文語、歴史的假名遣を始めとする様々なる修辭法を用ゐて、美しき日本語を再建せんと挺身してあり。美しき母語を持たんと欲するは、民族のまつたうなる憤れにあらずや。敢へてこれが潰滅を試みる輩は、「日本人は格別に劣等なる民族なれば、美しき國語を持つ資格なし」と言ふなり。

「言語は意志疏通を目的とするツールなり」と主張する者あり。外國語はさもあらん。然れども、母語はその域を超えて、思想を形成する基盤たるの性格を有す。意志を疏通するを得れば可なりといふに止まらず。美しき思想は美しき言葉に宿ると知るべし。

逆説を弄するに似たれども、所謂「分かりやすき文」を書かんと欲せば、即ち、美しき文を書くべし。單純なる會話文はさておき、複雑なる思想を人に説かんとするには、美しき、整然たる文を書くの要あり。コラムニストなどにして、人口に膾炙したるは、皆、推敲幾人にも及び、修辭巧みなるに因りて、人の心を動かすのゆゑなり。

(たかだいう 本會會員)

式子内親王御歌一考察

(「小倉百人一首」八十九番歌)

安田 倫子

『百人一首八十九番歌』に就て幾てより通説に疑問を抱いておりましたが、小名木善行先生の解説に接し、正に我が意を得た思ひです。

玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば

忍ぶることの 弱りもぞする

當時の高貴な方は、自身の内面をそのまま表に出す、直接、歌にして表現するといふことは、懐ひのが美德でした。作者の式子内親王(一一四九—一二〇一)は、後白河院の第三皇女です。畏れ多く尊いお立場の方です。そのお方が、ひたすら激しく、命を懸けてでも傳へたいものとは何だつたのでせうか。いつたいどういふことをのだらうかといふところに興味を持つていただければ、この歌の心を讀み解くきつかけとなるのではないかと思ひます。

歌の詞書に「百首歌の中に忍戀を」とあります。その中

の「戀」といふ單語だけに捉はれてしまつて、現在の解釋の大勢が「片思ひの心情を述べた歌」になつてゐます。果して本當にそれだけでせうか。

名歌と言はれる歌ほど、表には表現されてゐない眞意があるのださうです。だとすれば、それを受け止める側には「眞意を察する」力が備はつてゐなければなりません。

「忍ぶ」の意味について考へてみます。これは、ただ「我慢する」あるいは「我慢してゐればよい」と言つてゐるのではないのです。

式子内親王は、『忍ぶ戀百首』を後鳥羽院に献上しました。同時に、歌の友であつた藤原定家にもお渡しになられたのです。受け取つた定家は、何を思つたでせうか。定家は高級官僚であり、彼の日記『明月記』によれば、彼の歌の師は藤原俊成(『千載和歌集』の编者)であり、俊成は彼の父でした。定家は當時隨一の歌人でもあつた人です。(俊成は式子内親王の歌の師でもありました。)

内親王のお育ちになられた時代は、源平の動亂の最中でした。兄君の以仁王(後白河法皇の第三子、親王に宣下はなかつた)が、源頼政と謀り、平氏追討の令旨を出します。しかし治承四年(一一八〇)の亂は發覺し、以仁王は平等院の近くで捕へられ、殺される。このやうに五百年程も續い

てきた平和な國が亂れる時期であつたのです。加へて人々は凶作で食べるものにも不自由を強ひられました。そのせゐで宮廷にまで強盜團が襲つてくる、物騒な世の中でした。

内親王は、十一歳の時に賀茂の齋院に任せられました。

崇神天皇の御世から後醍醐天皇の時代まで、天皇の即位ごとに天皇の名代として、神様にお仕へするお役目として、未婚の皇女のどなたかが、伊勢やその他の主だつた神社の齋になられてゐます。齋王(齋宮・齋院)には、天皇の一番大事なお役目と同じく、日夜日本國の繁榮のために國民が平安に暮せるやうにと神々に願つて、祈りを捧げるお勤めがあります。内親王は、何とか平和な世の中をと願ひつつも、平和からかけ離れた、絶望的な状況を見聞きしつつ、祈ることしかできない我が身を幽瘁く思つていらつしやつたこととせう。そのやうなお立場であつた内親王の、「忍ぶ戀」といふお言葉です。定家は、内親王のそのお氣持を察しました。

内親王は二十一歳の時に病のために退下され、四十一歳ごろ出家なさいました。そして五十二歳で亡くなるわけですが、その間ずっと齋院であらせられた時と變らず、世の中の平和と安定を神に祈り續けられたさうです。齋宮を退いたからといつて、その思ひが緩むことはありません。生

涯を國家の安寧を祈つて過ぎられた方です。そのやうな方に私心があらう筈がありません。その皇女が、ひとり「わたくしのために」神に「私心の戀」ごときで命を懸けて戀の成就を祈るでせうか。

内親王にとつての「戀」は、「私心の戀」を指すものではありません。では「戀」とは何だつたのでせうか。

内親王の「戀」とは、平和で安定した日本國の姿のことなのです。定家は、内親王が、平和な御世が来るやうに、後世の人々に祈りの氣持を託したのだと受け止め、自分もこの内親王の氣持を引繼がねばならないと、理解したと思はれます。

定家は、政治家として、鎌倉の將軍源實朝と和歌を通じて親交を深め、それによつて亂世を鎮めて、天皇を中心とした平和で安定した國家の再建を圖りました。しかし實朝の暗殺によつて、それは叶へられませんでした。實朝は辛うじて『金塊和歌集』を遺してゐます。

定家もまた國の要職にありました。内親王のお氣持と同じく、國を思ふ氣持は人一倍強かつたと思はれます。高級官僚であるばかりでなく、歌人としての定家が考へたこと、それは、國の平安を祈つて生き抜いてくれた、力強い人々の魂の歌を遺したい、國家のために寢食を忘れて働いてき

た人々、その方々の思ひの文を、歌の形で詠まれた寶物を遺したい、それだつたのです。

先人達がどのやうに日本人の精神を大切に守つてきたか、それを後世に傳へるには、式子内親王のこの歌の眞意こそ、傳へなければならぬと悟りました。

遡つて考へると、日本の國家は、神代の昔から、天皇が治めてきました。天皇は、「大和の國・日本を護るために祈る存在」でありました(祭祀王)。

それが崩れ去らうとしてみたのが、蘇我氏をはじめとする、天皇ではない一族の權頭により、國が私物化されようとしてゐた時でした。

これではいけない、と立上つたのが、中大兄皇子(後の天智天皇)と弟君の大海人皇子(後の天武天皇)であり、お二人が中心となつて成し遂げたのが「大化の改新」(六四五年)です。

定家は考へました。あの時と同じやうに國家を立て直し、五百年以上續いてきた、天皇が治める「シラス」國の體制を護れねばといふ、その覺悟を紡ぐ言の葉の集大成として、「百人一首」には天智天皇のお歌を一番に置かうと。

是が非でも「シラス」國の體制を守り、後世の繁榮を可能にする種を蒔いて置くことが必要でした。それが彼の考

へた、日本の一大絃外詩となる「百人一首」といふ形だつたのです。

八十九番歌は、「定家よ、わたくしは、もう死んでしまふけれども、貴方の力で平和な國を護るための種蒔きをお願ひします」「假令この身が滅んでも、思ひは遣ります。貴方が後世に確實にわたくしの氣持を傳へ下さい。託します」といふ内親王のメッセージでした。

和歌の心得のない現代人の私達にも、このメッセージには既視感があります。それは昭和天皇の終戦の詔敕の一節です。

「堪へ難きを堪へ、忍び難きを忍び」とは、國難の状況において、國民一人一人の状況がよくわかられてをられたこととです。

陛下は、苦しい状況だけでも、一緒に我慢して欲しい。それはただの我慢ではない。我慢はするけれども同時に種を蒔いておけば、未來の我々の子孫に素晴らしい日本を遺すことができるといふ大御心を示しにされました。

日本國の天皇といふ御存在は、何時の時代の國難の時に、日本人のために、日本人の子孫の繁榮のために、頑張つていきませう、といふメッセージを送り續けてこられたのです。

天智天皇、式子内親王、藤原定家、昭和天皇と連綿と日本人の精神の中に傳へられ、息づいてゐる、大和魂の呼びかけに變りはありません。

「將來の日本國の繁榮のために種を蒔くこと、自分が礎になること」といふのは、普遍的な日本人の願ひであり、ずっと同じ精神が魂の底邊に流れてゐます。

大和に生きる人々の心を山櫻に例へたのは、江戸時代の本居宣長であり、大和魂を武士の心得としたのが幕末の吉田松陰でした。過去の時代の人々が事あるごとに、手本を示してくれたことに、思ひを致さなければなりません。

私たちも「百人一首」を手にとつて、定家の傳へたかつたところを讀み解いて、平和な日本を護る、未來の種蒔きをしようではありませんか。

なほ蛇足ながら、もと歌の「しのぶる」について説明します。「しのぶ」は上二段活用の場合「忍」を使ひ、「感情を出さぬやうに隠し耐へる」であり、四段活用の場合は「懐」と書いて、「思ひ慕ふ」の意味になります。通常、この歌は「忍」を使ひますので、前者の意味と思はれますが、それでは、「人に知られぬやうに隠し通すことが弱まつてしまつてはたいへんだ(もぞ)」は懸念を強調する係助詞複合(「となりませす。」「平和な御世」を祈ることは別に隠す必

要もなく、やはり「秘めたる戀」と見るべきでは」といふ見解も根強くあつて、この歌の最高の理解者であつた定家は自らが撰者となつた新古今和歌集の巻二・戀の部に輯録。さうなると最初の「絶えなば絶えぬ」は文字どほり「絶えてしまふなら絶えてしまへ」つまり、玉の緒が切れて玉がばらばらになつて人目に晒されようと構はないけれど、「秘めたる戀」こそは最後まで隠し果せねば、と讀めるといふ解釋のあることは承知してゐますが、小名木さんに觸發されて持論の展開を致しました。

參考資料

「ねずさんの日本の心で讀み解く『百人一首』」

小名木善行著・彩雲出版・二〇一五・四・二二刊

本居宣長

敷島の和心を人間はば

吉田松陰

朝日に匂ふ山櫻花

かくすればかくなるものと知りながら

やむにやまれぬ大和魂

(やすだりんこ 倫子塾 塾長、本會理事)

「文語朗讀會」の成果發表會

加藤 忠 郎

「日本語を美しく讀む會」あり。文語を讀む朗讀の會なり。平成二十六年二月より下丸子の大田區民プラザにて毎月文語の朗讀を勉強す。朗讀の指導はNHKのドキュメンタリーや朗讀にて活躍せられたるボイス・アーティストの橘由貴氏、文語の解説や講義は國語問題協議會事務局長の谷田貝常夫氏と文語の苑の高田友氏が擔當。發聲練習や文部省唱歌「春の小川」や「枕草子」の朗讀より始め、一年を過ぎぬ。區切りを附ける意味にて、平成二十七年四月三日、大田區民プラザにて成果發表會を行へり。

當日は橘由貴氏の別の教室の生徒も加はり、三十人近き者が日頃の成果を披露す。來賓とし、文語の苑代表幹事の愛甲次郎御夫妻、幹事の市川浩御夫妻の出席あり。愛甲氏は「平家物語—宇治川の先陣—」の朗讀を披露。演歌歌手の逢川正樹氏も途中で生徒たりしことありて、飛び入りにて、持ち歌の朗讀と歌唱を披露し、發表會に花を添ふ。橘由貴氏、徳富蘆花の「寒月」、清少納言の「枕草子—木の

戀」を朗讀す。いづれも思春期の少年の戀を歌ひし詩なり。「少年の日」の詩は、春、夏、秋、冬と、四節に分るゝが、「躰」といふ言葉、冬以外、春、夏、秋の全てに現る。此は少年の熱情の清らかさを暗示するものならん。「初恋」の方は「あげ初めし」、「人こひ初めし」、「踏みそめし」と「そめし」が三度も現る。人を戀する氣持を初めて知りたる思春期の初々しき感動を表現したるにやあらん。

予の出番は後から三番目にて、ピアノを伴奏に朗讀と歌唱を演じたる女性の次、NHKのアナウンサーの前といふ、下手さ加減が目立つ、甚だ嫌らしき位置。されどなんとか努力し、一應の格好は附けき。意地の悪しき惡友の言ふやう、貴殿のどちらと見るを樂しみに來たりしものを、期待外れなり。成果發表會の後の打上げ會にて、朗讀の指導者の橘由貴氏より講評あり。一年間といふ短き期間にも拘らず、皆素晴らしい上手になりしは驚きなりと。予に關しては、橘氏に遠慮なく指導せられしが、効果ありと感ぜられたり。

(かとう ただを 「公財」 日本發明振興協會副理事長 本會常任理事)

花」、「竹取物語 寶頭部分」と、模範的朗讀を披露するが、一同聴き惚る。谷田貝常夫氏は森鷗外の「扣鈕」、「即興詩人—花祭—」、高田友氏は萬葉集より「柿本人麻呂の長歌」、與謝野晶子の「鼓いだけば」を朗讀す。

参加者に印象に残りたる詩あるいは出演者を問ふアンケートを配布せるが、一部を紹介す。五代目市川團十郎の「ういらう賣り」、早口且つ難しき台詞を上手に讀みたり。因みに橘由貴氏は此を暗んずる由。「平家物語」、學校にて學びて以來久しぶりに聴けり。三者三様に讀まれ、各々の朗讀の中に、文章の美しき、面白さが生き生きと浮び上り、長き年月を生き抜きたる古典の凄さを改めて感じたり。與謝野晶子の「鼓いだけば」、彼女に斯かるあえかなる姉が居たりしは知らざりき。橘先生の素晴らしい別格なれど、皆も上手に朗讀せり、進歩著し。改めて文語の美しき、奥床しさを味はへり。皆、一年前に比べ大變聲が良く出て上手になられたりと思ひき。各々、本日の本番が一番良かりき。一年で斯かる進歩がみられたるは、橘先生、谷田貝先生の力なり。

予は柄にもなく佐藤春夫の「少年の日」と島崎藤村の「初

深

日中英 言葉の雑学(九)

高田 友

健太：天皇の御言葉のことを詔敕といふのですか。

高田：天皇の御言葉のことは、いろんな呼び方がある。和語では「みことのり」。廣く使ふのが「敕語」「勅」は略字)。漢文調では「綸言」。古い時代には、「綸旨」「旨言」などといふ呼び方があつた。「詔敕」といふのは、一番公式な、文章になつた御言葉のことだ。これは、天皇の御言葉といふよりは、政府の公式聲明文を天皇の名で出すといつた方が眞實に近いかも知れない。「御詔」「さらば」「敕諭」などと言つたら、天子の口頭の御言葉を指すことが多い。

「傳説あるも拜辭」つて、どういふ意味だと思ふか？

健太：全然分らない。

高田：「有難い御言葉を頂いても、御辭退申し上げる」といふことだ。總理大臣が、不祥事の責任を取つて、辭表を提出したときに、天皇から「辭任する必要はない」と敕免の御詔を載いても、やはり辭任するやうな場合に使ふ。

健太：昔は華麗な日本語があつたんですね。

健太：「告ぐ」つて何ですか。「告ぐ」ぢやないんですか。

高田：戦前の公式文書は、全部文語だつたが、「句讀點・濁點なし」といふ面白い原則があつたんだ。

健太：その方が重々しい感じが出るといふわけではせうね。

「終戦の詔敕」が歴史上最後の敕語だつたのですか。

高田：今だつて、「お言葉」とは言つてゐるが、あれも敕語と言へないことはない。

健太：でも、文語の敕語は、それ以來出てゐないのでせう。高田：そんなことはない。昭和二十一年元旦の「人間宣言」も文語なんだ。ただし、平假名で句讀點・濁點がついてゐるのが、それまでの敕語とは違ふのだが。

健太：なるほど、それが最後の公式の文語文といふわけか。高田：これは公式といへるかどうかは問題があるが、昭和二十七年に、總理大臣吉田茂が全國民をアツと言はせることをやつてのけた。皇太子(今上天皇)の立太子禮のときに、祝詞を捧げたのだが、これが全文、見事な文語體で、しかも最後に、「臣茂」と自稱したんだ。

健太：「天皇の臣下である吉田茂」といふ意味ですよ。戦後七年も経つてから、そんな表現をしたら、相當に世間から叩かれたでせう。

高田：マスコミからは、逆コースだと言ふことで、ずいぶ

「綸旨汗の如し」つていふのは、どいふ意味ですか。

高田：汗は一回流れ出ると、もう體内に戻すことはできない。それと同じやうに、天子の御言葉は、一回發せられたら取り消すことができないといふ意味だよ。

健太：それだけ重みがあるといふことですね。

終戦の詔敕といふのは、昭和天皇が御自分で放送なさつたと聞いたことがありますか。

高田：昭和二十年八月十五日の正午、聯合國に降伏するといふ趣旨の詔敕を御自分で放送なさつた。玉音放送といふ。

健太：天皇を玉に准へることがあるんですね。「龍顔」も

「玉顔」も天子のお顔のことではせう。

高田：「龍顔」はそのとほりだが、「玉顔」は天子の外に、美人の顔を指すこともある。「長恨歌」に「馬嵬の坂の下、泥土の中、玉顔を見ず、空しく死せし處あり」とあるが、玄宗皇帝が、楊貴妃を殺してしまつた所まで戻つて来て、嘆いてゐる様子を描いてゐる。

健太：終戦の詔敕つて、文語の綺麗な文體なんでせう。

高田：「朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク」で始まる、美しい文語文だよ。

ん非難されたが、何を言はれても平氣な人だつたからね。

健太：昔は根性のある政治家がゐたんですね。

ところで、歴史の資料で、詔敕の最後に「御名御璽」と書いてありますが、あれは何ですか。

高田：敕語の最後には、天皇の署名があり、その下に天皇のハンコが押してゐる。

そのままに寫すならば、昭和天皇の場合、「裕仁印」とする所だ。ところが、帝王のお名前を臣下が口にするのは不敬に當るんだ。そこで、「裕仁」と言ふ代りに「御名」と言ひ、「印」の代りに「御璽」と言つたんだ。

健太：官中にある「劍璽」の「璽」のことですか。

高田：いや、違ふ。「劍璽」は「三種の神器」の「草薙の劍」と「八坂瓊の勾玉」のことだ。この勾玉のことを「神璽」といふ。それに對して、ハンコが「御璽」。正式には「天皇御璽」と言ひ、印影そのものも「天皇御璽」と彫つてある。

健太：親類の伯父さんが勳何等かをもらひましたが、天皇のハンコが押してあるといふことです。「天皇御璽」ですよ。

高田：いや、違ふ。天皇のハンコは二つあつて、法律などの公式文書に押すのは「天皇御璽」。それに對して、位記

に押すのは、……………。

健太…位記つて何ですか。

高田…叙位者にその旨を記して與へる文書のことだよ。位記に押すのは「大日本國璽」(國璽)といふんだ。今でも、法律文書には御璽、位記には國璽を押す。

健太…せつかく御璽國璽を押してもらへるんだから、文章も文語にして欲しいところですよ。天皇の御言葉くらゐ、文語に戻したいですね。人間宣言でその傳統もおしまひになつてしまつたのか。

高田…その後で、草案だけの「謝罪詔書」といふのがあるんだがね。

健太…なんですか。聞いたこともない。

高田…平成になつてから、文藝春秋が発掘したんだが、完全な文語文の詔教草案が出て来たんだ。

健太…いつ頃書いたんですか。

高田…それが分らないんだ。宮内廳長官が天皇の御意志を承けて書いたと推定されてゐるが、いつ頃であるかがさつぱり分らない。昭和二十五年よりは前だらうと言はれてゐる。昭和二十三年頃といふ説が強いやうだ。

健太…どんな内容なんですか。

高田…戦争で國民に迷惑をかけたことを詫げる詔書なんだ。

従来の詔勅とは全く違ふことを、厳しい制限の下で書いたのだから、模倣するパターンといふものがない。そのため、非常に獨創的な文章になつてゐる。リズムの音楽的なこと言つたら、文語文の御手本にしたいくらいだ。

健太…文語は權威主義的だからいけない。天皇の御言葉を文語で書くのは民主主義に反するといふ人があますが、……………。

高田…そんなことを言つてゐたら、日本文化そのものがないことになる。

センター試験から、古文と漢文をはづせと言ふ人が多いやうだが、さういふ人は、實用に役立たないものは、存在する価値がないと言つてゐるんだよ。

昔、コマーシャルで、「ただ咲くだけの花よりも、食べられる實を付ける花の方が美しいと私たちは思ひます」といふのを聞いて、僕は腹を立てたんだ。薔薇の花には何の価値もない、と言つてゐることになるぢやないか。まあ、食品会社のコマーシャルだつたから、目録立てても仕方がない。

健太…藝術なんか、腹の足しにならないから、地上から追放してしまへ、と言ふ思想ですものね。

「靜ニ之ヲ念フ時憂心灼クガ如シ。朕ノ不徳ナル、深ク天下ニ愧ツ」といふ衝動的な文句がある。

健太…おいたはしい。——片假名なのに、濁點・句讀點はあるんですね。

高田…うん。昔のままではいけないと思つたのだらう。それに、民主的でなささうな言葉を使ふとGHQに睨まれるから、その點も氣を使つてゐる。

健太…「朕」は使つてゐるんですね。

高田…「朕」は使つてゐるが、「臣民」は使つてゐない。「國民」「萬姓」で置き換へてゐる。「萬姓」は中國の古典にはある言葉だが、一般人民を指す。

健太…百姓の百倍ですものね。

高田…「皇祖皇宗の神靈」もない。

健太…なんですか。それ。

高田…「皇祖」は天照大神。「皇宗」は代々の天皇。その神靈といふのでは、復古調だといふことになるから避けたのだらう。ただ「祖宗」と言つてゐる。

書き出しがかうなんだ。「朕即位以來茲二十有餘年、夙夜祖宗ト萬姓トニ背カントラ恐レ、自ラ之レシ勉メタレドモ勢ノ趨ク所能ク支フルナク……………」。

それにしても、この「謝罪詔書」といふのは名文だよ。

高田…さうだ。言ひ換へれば、京都のお寺なんか、實用の役に立たないから、全部毀して、宅地にしてしまへといふやうなものだ。

健太…明治の始めの廢佛毀釋は、本當にさういふことをしようとしたんですよ。

高田…新カナ、常用漢字、文語の廢止はその轍を踏んでゐるんだ。

實用一點張りの戰後思想のために、日本人は、藝術を奪はれ、詩を奪はれ、論理的思考能力を奪はれ、敬虔な氣持を奪はれ、道徳性を奪はれ、こんな浅ましい國民に成り下つてしまつた。

電車の中で若者が老人に席を譲らないのも、もとはといへば、國語改革から始つたんだ。

健太…僕は譲りますよ。

高田…俺も譲るよ。今日も、お婆さんに譲つた。

健太…御老人から席を譲られて、向ふも面喰つたでせうね。

高田…まあまあ、私と變らないお年ですのに、と言はれてしまつた。

健太…先生のことだから、何か言ひ返したんでせう。

高田…私、若白髪なんですよ、と言つてやつた。

(たかだいう 塾講師)

熊野詣

安東 路翠

春

望み見る比叡の山の静けさをよすがにけふの旅のはじまり
清しさが空を廣げし那智の瀧風を仰ぎし白き布帛

* 布帛 || 御手座のぬき、神に奉る物全て
みあらかの所に整ふ神域の樟の氣配香んばしきかな

* みあらか || 宮殿、御殿を敬つていふ
金泥の重紙に詠まるる道なりきひらけし丘に水仙は伸ぶ

* 鳥の子紙に金銀泥の雲形をかく
目の會ひし大き羽根なる神鳥翔ちてゆきしに聲は残れる

* 神鳥 || 熊野午王、鳥は神使なり
集ひ来て旺んにありし慶ひの盃を交しつ書讀食しけり

神域に栽培せられし秋茄子のみづゝしさを皿にいたゞく
木漏れ日に餘日を惜しむ冬櫻社の鈴に在る増すらむか

赤々と遠玉大社の樓閣の玉じやりの音の春を展げし
花の下有馬皇子の藤代をもとほりゆけば御影浮び来る

* もとほる || めぐる
すべをなみ千年の叱迎へ來し熊野の神の春の鐘なり

夏

金人の言の葉聖し白蓮の開き咲けるは永久のみをしへ
* 金人 || 佛陀・佛像

御掌に受く白く豊けき蓮の花無香のかをり浮び來たりし
夏杉の神の風顔よこぎりて黄蝶は昇る久遠の千木へ

はた、神鳴きとゞろきて熊野路の白き石碑の文を洗へり
* はたた神 || いかづち、雷、霹靂神

峠越え神を傳へし人々はイニ神倉の巨石を記る
* イニ || 住、いにしへの意か、神倉 || 神倉殿(伊勢)

どうぐと那智の奥よりひたすらに急ぎし水音壺へそゞぎ
つ

久方の天の宮路を訊ねむやいにしへ人もこゝろ満ちてし
夕霧の青岸渡寺の古き宿真鍮の膳の皿は大きく

霧山のしひたけ籠につみ宿の女將の方言柔く透りて
龍宮の御宿なりとて粘菌は永久に守らん露の身なれど

* 粘菌 || 原生菌類、南方熊楠の主研究対象
熊楠の粘菌の學守り來し限なきひかり山にひろぐる

秋

本宮に集ひし秋のお歌會講師の御聲長く響けり
本宮の御歌響ける夕光の金の寶珠に神鳥影

珠玉のごと零りつらなる慶の間に一花輝く寒椿かな
しめ縄の大門くゞり見ゆるなき吃に向へり王子社の庭

大日の加持經修す修驗道藤代王子の道を急げり
印契と強き面射しおほてらの眞の法に深く染りて

* 印契 || 佛教、特に密教で、指を種々の形に組
んで佛、菩薩に祈る

法衣尼を案内の阿闍梨冬の日に崩さぬ笑顔五智に輝く
* 五智 || 佛の具へる五つの智慧

大西日空海一遍上人のふり返りたる峰の岸かな
白髪のをみな御面鏡杉蔭に消ゆるや瀧の神にあらざりき

夕陽を背にもどり來し王子道詞にせぬも尊かるらん
肯空の彼方に尊の祀られし彌生眞近の梅花をあびて

空海の生きて太初和魂の息吹と共に母神はこゝに
* 和魂 || 柔和の徳を備へた日本民族の太初から

の魂、神の優しい側面

銅筒と青銅管を沈めし鏡の池の聖なる籠り
* 鏡の池 || 青銅器を秘匿したいはれあり

(あんじょう ろすい 日本畫家、本會理事)

冬

水分の清らの水を手を手に掬ひ笹鳴を聞く朝の氣の中
* 水分 || 分水嶺、笹鳴 || 鶯が冬に鳴く聲

水分の御屋根の竝みの年深み拍手を打つ人に添はむと
いづくにも水音幽けき石疊八千草生ひし山頂の徑

幡蓋の赤き貝の精新雪は御母産しますその身にそゞぐ

十一月に講演していただいた谷崎昭男先生は、聖教新聞に歴史的假名遣のことを書かれてゐたことから、御連絡をとつて講師を御願ひしたものです。昨年昔の戀文が大量に見つかつて話題となつた谷崎潤一郎は、先生の父上の兄にあたりますが、その御兄弟は不仲になられてゐたやうで、保田與重郎や福田恆存の話は出て、谷崎潤一郎のことは西田幾太郎の言葉で切捨てられました。

石井公一郎講師は、△石橋・ブリヂストン△といふ大きな組織の中で、世界中を飛びまはつて、今はやりの言葉でいへば、グローバルなリーダーシップを發揮されたさうですが、その活動の原動力となつたのが、若い頃からなじんできた文藝文の力だと断定されます。『回想 學徒出陣』といふ本（今は電子書籍になつてゐます）を編集、出版されましたが、自身その一員となつた軍隊において、文章は皆文語文であり、記憶するにはたいへん重寶なことはだつたと回想されてゐます。

本會のホームページについては、昨年、安田倫子理事が管理者となつてゐるフェイスブック「國語問題協議會FB俱樂部」に飛べる柱を作りました。國語に関はる

投稿であつても現代假名遣で結構といふことで、今や千数百名のメンバーがゐます。その影響か、今までは變化が少く、あまり訪問者のおなかつたものが、今ではアクセス数が倍してゐます。そこで今年からは、読み易い文章で言語のことを扱ふ「日本語あやとり」なるコラム欄を設け、四名の筆者の文章を毎月交るがはる載せてゐます。クイズもあり、肩肘がはらないやう心掛けた讀物ですが、こちらは正假名遣を使つてゐます。

電網の世界の話今一つ、會員の兼武進氏が「シャーロック・ホームズの冒険」を新たに正字正假名遣で編譯され、それが電子書籍となつて公開されてゐます。ひどい新譯の多い中で、十九世紀末倫敦の雰囲気、を漂はせた譯文でホームズが讀めるのは大いなる楽しみです。



事務局長 谷田貝常夫

國語國字編集委員 市川浩

高田友

中井茂雄

谷田貝常夫

インターネット URL

國語問題協議會

<http://kokugomonndaikyō.sakura.ne.jp/>

國語問題點檢

<http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>

關聯電網

文語の苑

<http://www.008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>

文字鏡研究會

<http://www.mojikyo.org/>

横濱五十番館

<http://literature.jp/>

(銜申申閣(「契沖」))

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>

平成疑問假名遣(高橋一郎)

<http://homepage3.nifty.com/gimom/>

日本漢字教育振興協會

<http://www.kanji-kyoiku.com/>

高池法律事務所

<http://www.takaiki.com/>

地獄の箴言

<http://kimura39.txt-nifty.com/>

言葉の救はれ―福田恆存論(前田謙二)

<http://logos.blogzine.jp/1/>

現代國語への處方箋

http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/

文字文化協會

<http://www.pcc.or.jp/>